

宮おんのくんち

作 山之内 宏一

登場人物

宮崎太一	四十九歳	平凡なサラリーマン。初めてのくんち参加に全力を尽くす。
宮崎節子	四十四歳	宮崎の妻。夫との生活に疑問を抱いている。
辰巳龍太郎	三十五歳	根曳き頭。くんち馬鹿。
辰巳千恵子	三十一歳	辰巳の妻。くんち馬鹿な夫を支える。
城戸雄一	十九歳	根曳き仲間。大学生。
田島陽平	十九歳	根曳き仲間。工場勤務。一生懸命だけど、少しとろい。
洪笠亀夫	三十六歳	根曳き仲間。飲食店に勤めている。ギャンブル好き。
明石虎男	二十七歳	根曳き仲間。左官屋。喧嘩っ早い。
松島玲奈	十九歳	雄一の大学の友達。
鈴木花子	十九歳	雄一の幼なじみ。短大生。
山城元	三十九歳	長采。果物屋の主人。
吉田とし	六十三歳	町内会長の奥さん。婿養子を取り、家の米屋を継いでいる。くんち大好きな世話好き。口数が多く、みんな苦手。
加藤三郎	十九歳	浪人生。家が引越し専門の運送屋で、忙しい時は仕事の手伝いをさせられている。
花房綾子	三十三歳	スナック「かぶりつき」のママ。
吉田 宏二	十五歳	吉田としの孫。前回のくんちの時に囃子で出場。祖母の影響で、くんちにはうるさい。前回のくんちで雄一に世話になったので、雄一には頭が上がらない。

一場

しやぎりが聞こえてくる。しやぎりの後に、根曳きの掛け声と囃子はやしが聞こえる。舞台が明るくなると、そこは鯉川町こいかわまちのくち小屋。上手に、玄関があり、奥に、隣の部屋に通じる出入口と窓がある。下手奥に、台所、便所や倉庫に通じるドアがある。今日は、くんち小屋入り（六月一日）の前日の夕方。下手、部屋の壁には町内の町旗ちやうきと町内の弓張り堤灯が掛けてある。小屋の中央、やや下手よりに長テーブルとイスが置いてあり、宮崎が奥の部屋からキャスター付きの洋服掛けに、吊るされた金を動かしながら、出て来る。イスに座って、金を叩き、囃子はやしのかけ声を始める。

宮崎

ヨヤーセ（金をゆっくり三回叩く）。ヨヤーセ（金をゆっくり三回叩く）。ヨヤーセ（金をゆっくり三回叩く）。
（勢いよく）ヨヤセ（金を早く三回叩く）。ヨヤセ（金を早く三回叩く）。ヨヤセ（金を早く三回叩く）

腰に手をあてて、腹に力を入れる仕草をする。

宮崎

サーヨーイヤサ（金を二回叩く）。サーヨーイヤサ（金を二回叩く）。

節子が上手より出て来る。開いている玄関口から中を覗く。

節子

ごめんください。

宮崎、声の方に振り向き、節子に気づく。

宮崎

おう。

節子、周りを見ながら、入ろうかどうかどうしようか迷っている。

宮崎 まだ、誰も来とらんよ。何ね。

節子 明日小屋入りでしょう。何か準備するものは無かかと思うて。

宮崎 そがんことか。

節子 そがんことって。

宮崎 話したやろう。

節子 いいえ。

宮崎 言うたはずばってん。

節子 いいえ、何も聞いとりません。

宮崎 背広ば着て行くけん。

節子 そいじゃ、背広とワイシャツ用意しときます。

宮崎 ああ。

節子 いつもそうね。

宮崎 何ね。

節子 いつもそう。

宮崎 そいけん、何ね。

節子 いいえ、よかです。

宮崎 何ね、そん言い方は。

節子 あなたには分からんとでしよう。

宮崎 何が分からんと。

節子 よかです。そいより、くんちもよかけど、あの話、きちんと考えてくださいね。

宮崎 そんなことは……

節子 失礼します。

宮崎、黙って節子を見送る。根^ね曳^ひき仲間の^き洪^ひ笠、雄一、陽平が入って来て節子とすれ違^{ちが}う。

みんな 今晚は。

宮崎 今晚は。

節子、みんなにお辞儀する。

宮崎 家内です。根曳き仲間の渋谷さん、城戸くん、田島くん。

節子 今晚は。お世話になっております。失礼します。

節子、出て行く。

陽平 (節子の後ろ姿を追いながら) きれか人ですね。

雄一 宮崎さん、もう来とったとですか？

宮崎 何か、落ちつかんで。

雄一 おいもそうです。

渋谷 だいで、そうなるよ。

陽平 渋谷さんもそうなの？

渋谷 そいはどうゆう意味ね。

陽平 いつも、くんちのベテランて言いよっけん。

渋谷 くんちは特別。宮崎さん、くんちに出るて、なかなか出来ることじゃなかけんね。

宮崎 はい、私も出れるて夢にも思うとらんやったです。

渋谷 どがんですか？(金を叩く振りをする)

宮崎 なかなかもういかんです。

渋谷 明日やけん時間無かよ。雄一、早う練習、練習。

雄一 言われんでも、そんなために来たとやけん。

洪笠 それはそれは、失礼しました。

雄一 行きましようか。

陽平 おいも。

洪笠 気合い入れて、練習せんぼぞ。

洪笠を残し、三人は、太鼓などが置いてある奥の部屋へ、宮崎が使っていた金を引きながら、行こうとする。

宮崎 ああ！

宮崎あわてて、小走りで、下手のドアから出て行く。

洪笠 何ね？

陽平 さあ。

洪笠 雄一。

雄一 はあ。

洪笠 わい、知つとつとやろ？

雄一 緊張すると、近こうなるらしかです。

洪笠 近こうなるて？

雄一 便所。

陽平 ああ、便所。

洪笠 頼りんなかね。

雄一 大丈夫やろか？

洪笠 そいけん、おいは反対やったとき。

雄一 何がですか？

洪笠 宮崎さんごたる年よりば根曳きに入れると。

陽平　そげん言うても。

雄一　長采と頭かしらが決めたとでしよう。

渋笠　そいはそうばってん。町内会長も反対しとった。

三人、下手を見ている。

陽平　大やったら、困るよね。

雄一　どこでん、できんしな。

渋笠　大じゃなからう。ふつう小やろう。

雄一　そいやったら、よかけど。

渋笠　賭けばすうか？

雄一　ええ。

渋笠　便所。

雄一　はあ。

渋笠　大か小か。

陽平　そがんことして、よかとかなあ。

渋笠　よかさ。雄一、どうや。

雄一　賭けですか。

陽平　宮崎さんに失礼かとじゃあなかですか。そがんやけん、奥さんに逃げ……

渋笠　何て。陽平。今、何て言うた。

雄一　陽平！（渋笠に）よかですよ。それで、なんば賭くつとですか。

渋笠　松乃屋のうどん。

陽平　（嬉しそうに）松乃屋のうどん。

雄一　すうどんね？

渋笠　いや、すうどんは寂しか。きつねうどん。

雄一　じゃ、きつねうどんで。

陽平　（大好きなきつねうどんと聞いて、夢見ごっこに）きつねうどん！

渋谷　よかか？

渋谷・雄一（同時に）おいは小。

陽平　（この時、小さい声で）大。

渋谷　二人同じやったら賭けにならんたい。雄一、わい大にせろ。

雄一　いやばい。渋谷さんこそ、大にしたらよかじゃなかですか。

渋谷　いや、おいの気持ちは変わらん。

陽平　（思わず大きい声で）大！

渋谷、雄一はびっくりして、陽平を見る。

渋谷・雄一　陽平、なんて。

陽平　大。

渋谷　大で。

雄一　大小の大？

陽平、大きく頷く。

渋谷　わいは賭けに反対やったろうが。

陽平　（少し恥ずかしそうに）そうやけど、松乃屋のうどんぐらいやったらよかかな思って。

雄一　陽平は松乃屋のうどん好きやもんなあ。

渋谷　わいも調子んよかなあ。

陽平　そげん言うなら止めます。

渋谷　いや、よかよか、こいで賭け成立たい。

宮崎、下手から出て来る。

陽平 宮崎さん。大丈夫ですか？

宮崎 すんません。いつも緊張すつと……。

渋谷 急に行ったけん、ビックリしたばい。

宮崎 いやあ、恥ずかしなあ。

渋谷 どげんあつとですか？

宮崎 え。はあ、その（照れる）。

雄一 いや、これからのこともあるし、（渋谷、陽平を見回しながら）知つといた方がいいかなつて、三人で。

渋谷、陽平、大きく頷く。

宮崎 （頭を掻きながら）恥ずかしか話ばつてん。便所が近こうなつとですよ。

陽平 そいで、便所で今、何ばしたとですか？

宮崎 はあ？

渋谷 （陽平を睨む。宮崎に）おいの友達にもおつたですよ。緊張すつと便所の近こうなる人。

宮崎 ああ、そがんですか。そんな人は便所の近うならんように何かしよつたですか？

渋谷 そうねえ。大事かことの前には水ば控えよつたかなあ。

雄一 そうか。飲まんやたら出らんもんなあ。

宮崎 （困つたように）はああ。

陽平 宮崎さん、そんな方法はもうやつてみたと？

宮崎 はあ、そいが、そうじゃなかとですよ。おいの場合……。

渋谷 そうじゃなかて。

雄一 え、水は関係なかと？

宮崎 はあ、腸の方が。(お腹を摩る)

陽平 大の方。やったあ！

宮崎 「大の方、やったあ！」て何ですか？

渋谷 いや何でんなかよ。

陽平 渋谷さん。松乃屋のうどん。

宮崎 松乃屋のうどん？

陽平 (はしゃいで) 松乃屋のうどん！

宮崎 何ね、それ。

陽平 賭け。

宮崎 かけ？かけうどん？

陽平 いいや、きつねうどん。

宮崎 きつねうどん？

陽平 おいしかですよ。

宮崎 かけうどんじゃなくて、きつねうどん。かけ、かけ、まさか。

渋谷 いやあ、こいつらが賭けばしよう言うて。

雄一・陽平 ええ。うっそう！

渋谷 (雄一、陽平の言葉を遮るように) おいは宮崎さんに失礼かけん止めろって言うたとけど。せろせろ言うもんやっけん、つい。

宮崎 おいんことば賭けたとですか。

渋谷 (雄一、陽平に) やっぱ宮崎さんに悪か。賭けはなし。

陽平 (元気なく) ええ、勝ったとに。

渋谷 わいも悪かて言いよったろうが。

陽平 そやけど、自分が負けたけんて。

渋谷 宮崎さん、すまんね。

宮崎 いや、ちよっとビックリしたばってん。おいは気にせんですよ。

陽平 (渋谷に) 宮崎さん気にせんて。

渋笠 いや、そいはいかん。よかろう雄一。

雄一 やっぱ。渋笠さん信用でけん。

渋笠 陽平、賭けはなし。

陽平 きつねうどんの逃げて行く。

渋笠 こがんことば頭かじが聞いたら怒らるつぞ。

陽平 自分が言い出したとに。

雄一 陽平、もう言うな。

陽平 ばってん。

雄一 もうすぐ頭の来るけん。

宮崎 え？

雄一 辰巳さんですよ。

宮崎 ああそうやった。根曳き頭、辰巳さん。

渋笠 宮崎さん、くんちの間は頭の命令は絶対ですけんね。

宮崎 わかっとなります。

渋笠 頭の指示で根曳きは動くんです。そうせんば、船が動かんとですよ。

宮崎 はい。

陽平 渋笠さんもばい。

渋笠 何て。

陽平 頭より年上やけんて。

渋笠 おいはちゃんとしとつぞ。

雄一 あの、宮崎さんはこの前の飲み会で決まったこと宮さんて呼んでよかですか。
はい。

渋笠 一番年上やけど、くんちの新人やけんね。

雄一 渋笠さんは亀さん。

渋笠 そいは許さん。

雄一　そがん、勝手か。

陽平　宮さん、年いくつでしたっけ？

宮崎　四十九。田島君は？

陽平　十九。

宮崎　娘と同年か。

雄一　娘さんのおつとですか？

渋谷　宮さん。気いつけんばよ。

宮崎　何ばですか？

渋谷　こいつら悪かけん。

雄一　そがんこと、誰かと違うてなかです。

陽平　雄一は、もつつもんなあ。

辰巳、入って来る。

みんな　今晚は。

辰巳　おう。何やこれだけか。

雄一　明日、小屋入りやけん。いろいろ用事のあるごたつです。

渋谷　気合ば入れてほしかね。

辰巳　亀さんのごと、ひとりじゃ無かけん、みんないろいろあつとやろ。

宮崎　え、渋谷さん一人もん？

陽平　亀（あわてて言い直す）渋谷さん、奥さんに逃げられたと。

渋谷　よかやつか、そがんことは。

陽平　こん前のくんちの後で。

宮崎　七年前に。

雄一　よか奥さんやつたとに。

渋谷 (陽平、雄一に) 馬鹿、大人にはいろいろあつと。(宮崎に) ねえ、宮さん。

宮崎 はあ。

辰巳 亀さん、大変やったもんな。

渋谷 頭、そんな亀さんと呼ぶと止めてもらえんやろうか。

辰巳 みんなで決めたやろう。あだ名で呼ぼうって。

陽平 宮崎太一さんやから宮さん。渋谷亀夫さんやから亀さん。

渋谷 そやったら、渋谷さんでよかやろ。

辰巳 亀さん。めでたかけん、よかやつか。

陽平 頭の指示には従う。

渋谷 うるさか。

辰巳 宮さんどうね？

宮崎 いや、うまくでくつか心配で。

辰巳 最初はだいでん、そげんですよ。

雄一 そいじゃ、練習しましょうか。

宮崎 はい。ああ、ちよつと。

宮崎、下手へ走り出す。

辰巳 何ね。どうかしたと？

渋谷 自然が呼んどるとです。

辰巳 自然が……。

三郎、入口から入って来る。

三郎 今晚は。

辰巳 おう。何ね。今頃。

三郎 明日の小屋入りの町旗ちようきがあつたか、気になつて。

洪笠 三郎が持つとや。

三郎 ええ、バイトバイト。先頭せんとうば行くけん、テレビに映るかもしれん。

陽平 間違まちがいなく、映るさ。

三郎 こいで、彼女のかのじよでくつかもしれん。

陽平 三郎、よかなあ。

三郎 くんちくんちに出る方が、おいは羨うらやましか。代われ。

陽平 そいはだめ。

洪笠 三郎はよか体しとるな。

三郎 引つ越しの荷物運びで鍛えとるけん。

陽平 洪（言い直して）亀さんの代わりはいつでん、でくんね。

洪笠、陽平を睨む。陽平、ふんとそつぽを向く。

三郎 おお。て、（洪笠に）洪笠さん、どつか悪かど？

洪笠 そがんことはなか。（陽平を睨みながら）陽平！

陽平 心の悪かど。

三郎 二人どげんかしたと？

陽平 賭けに勝つたとに。亀さん……

辰巳 賭け！

洪笠 なんもなかです。（陽平を睨みながら）陽平！

辰巳 賭けて、まさか。

洪笠 そげんこと、なかくて。（雄一に）なあ、雄一。

雄一 （とぼけて）はあ。

辰巳 雄一、どうや。

雄一 すんません。

辰巳 困ったもんやな。(雄一、陽平に) こいからは、だめぞ。

雄一・陽平 はい。

渋谷 頭になったからで、偉えろうなつて。昔は、わいも……。

辰巳 亀さん。頼みますよ。

陽平 頭の言うことには従うて、言いよつたくせに。

雄一 陽平、練習の準備はすつぞ。

渋谷 そうそう、早う行け。

陽平、雄一、金を持って奥の部屋に出て行く。ガラス戸で二人の準備する姿が見える。宮崎が出て来る。

渋谷 お、帰つて来た。

辰巳 宮さん。大丈夫ね？

宮崎 ああ。はい。

辰巳 何かあつたら言うてくださいよ。

宮崎 はい。

三郎 今晚は。

宮崎 あ、今晚は。

渋谷 (宮崎に) 三郎。明日、町旗は持つと。

宮崎 宮崎です。よろしくお願いします。

三郎 いえ、おいこそ。

宮崎 みんなは？

渋谷 もう、練習ばしよるよ。

宮崎 そいじゃあ。

辰巳

頑張って。

宮崎

はい。

宮崎奥のガラス戸を開け、出て行く。洪笠、三郎、辰巳、それを見ながら話している。ガラス戸越しに三人の姿と、金、太鼓の音、囃子の声が聞こえる。サーヨーイヤサ。ヨーヤーセ。ヨーヤーセ。途中で、陽平がガラス戸を閉める。閉めると音は小さくなる。

三郎

あん人が、最年長根曳きですか。

洪笠

そう。お腹の弱かごたるけど。(辰巳に) 頭、大丈夫とですか。

辰巳

おいはよう分からん。長采が言いよったけん、大丈夫やろ。

三郎

体調の悪かとですか。

洪笠

そげん訳じゃなかけど。

三郎

そげん訳じゃなかけど。

洪笠

緊張し過ぎて、便所の近うなつとて。

三郎

そいは心配かですな。

辰巳

そいだけ、真面目にしよつてことさ。

洪笠

そいで、出来ればよかですけど。

辰巳

一生懸命、やれば、結果はづつき。

洪笠

はいはい。頭の言うことは正しか。

辰巳

亀さん。今日は絡むね。

洪笠

言いとおて、言いよつとじゃなか。心配しとつと。(三郎に向かつて) なあ。

三郎

(困つて) おいは帰ります。

洪笠

もう行くとや？(奥のガラス戸に近づいて行く。)

辰巳

ご苦労さん。明日、頼むな。

三郎

はい。そいじゃあ。

三郎、出て行く。洪笠、奥のガラス戸を開ける。練習の音が聞こえてくる。宮崎、金を叩き間違う。宮崎の『あ、すみません。』の音が聞こえる。

洪笠 (奥に向けて) 宮さん、明日は大事か小屋入り、打ち込みばい。

宮崎 (奥から) すんません。

洪笠 町が恥じかくけんね。

陽平 (奥から) 亀さん、うるさか。

洪笠は奥の陽平を睨む。

辰巳 陽平も頼もしかねえ。

洪笠 生意気かと。

辰巳 賭け事は、だめやけんね。

洪笠 七年前とは違う。

辰巳 奥さんと別かるる前、ひどかったもんなあ。

洪笠 そんなことは、言わんでくれる。

辰巳 すまん、すまん。

(話題を変えようと) 頭。無理かもしれんね。

辰巳 何が。

洪笠 宮さん。四十九やろう。

辰巳 そいけん、何ね。

洪笠 四十九で、初めてのくんちで、根曳き。

辰巳 年じゃなか、本人のやる気たい。

洪笠 そやけど、若かもんごたる体力は無かけん。

辰巳 若こうても気合いの入いっとなんやったらだめさ。

波笠 そやろか。

辰巳 年とは関係無か。おいはだいでん、気合いの入っとなん奴は許さんけん。

波笠 さすが根曳き頭。言うことの違う。

辰巳 嫌みね。亀さんも注意せんば。

波笠 おいは、いつも一生懸命しよつよ。変なこと言わんで。

宮さんの囃子の声が聞こえる。

辰巳 ちよつとこつちへ来い。

三人下手から出て来る。テーブルの後ろに並ぶ。

辰巳 亀さん、手本ば見せてやって。

波笠 え、よかけど。(雄一を見て) 雄一、お前やってみる。

陽平 なんか狡ずか。

雄一、威勢良く、かけ声を出す。

雄一 サーヨイヤサ。ヨイヤセ。ヨイヤセ。

波笠 さすが、くんちエリート。(陽平に向かって) 陽平、おまえもやれ。

陽平 サーヨイヤサ。ヨイヤセ。(拍子を崩して) ヨイヤセ。

波笠 もうよか。

辰巳 陽平、気合入っとなんぞ。

陽平 入れとつです。

渋笠 入つたらん、入つたらん。

陽平 (渋笠に向かって) 入れとつです。

辰巳 もうよか。次、宮さん。

山城が入って来る。

山城 今晩は。

みんな 今晩は。

山城 頑張つとるね。

辰巳 お疲れさんです。明日の打ち合わせですか。

山城 ああ。(場に居るみんなに向かって) いよいよ明日は小屋入りばい。みんな、頑張ろうで。

全員 (気合いを入れて) はい。

山城 (辰巳に向かって) どうね？

辰巳 今、練習しよつとこです。

吉田としが入り口から入って来る。その後ろに宏二が隠れるようにして、入って来る。

とし 今晩は。

みんな 今晩は。

山城 奥さん。どがんとしたとですか。

とし そばば、通つたら、みんなの声のしたけん。

辰巳 練習しよつたとですよ。

宮崎 誰？

陽平 町内会長の奥さん。

とし あんた。宮崎さんね。

宮崎 はい。

とし 初めてのくんちはどうね？

宮崎 はい。大役が務まるか・・・。

とし ちよつと頼りんなかね。

宏二、としの後ろから顔を出す。

とし 孫の宏二。

宮崎 (宏二に) 今晚は。

宏二、黙って、軽くお辞儀する。

宏二 (少し、小声で) 金叩きよつたとはおじさんやろう。

宮崎 あ、はい。

宏二 (ちよつと生意気に) おじさんだめじゃん。リズムの違ちがうとつたよ。

宮崎 ええ。

とし 七年前に出たとよ。

宮崎 ああ、川船の囃子ですか？

とし そう。(思い出しながら) 今度の囃子の子たちはうまかねって、他の町の人からもよう誉められたとよ。

宮崎 はあ。

宏二 そいから、音も悪かった。

宮崎 はあ。

雄一 宏二。

宏二 あ、雄一兄ちゃん。(急におとなしくなる)

とし 長采、明日の打ち込み大丈夫やろうね？

山城 (急に聞かれて、びっくりして) え、そりゃあ、だ、大丈夫でしょう。なあ、頭も、もちろん。

辰巳 (宮崎に睨みきかせて) 最年長根曳きやから、みんな注目しとるけんね。

宮崎 はあ。ああ。

宮崎、急いで奥へ行こうとする。雄一がそれを止める。

とし どうかしたとね。

雄一 いいえ、何でんなかです。

宏二 本当に大丈夫やろか。

雄一 (宏二に向かって) 何でんなかです。

宏二 雄一兄ちゃんの言いよっけん。大丈夫やろう。ばあちゃん。

雄一 (宮崎に小声で) 宮さん、我慢。

宮崎 (雄一に小声で) ええ、でも。

雄一 (宮崎に小声で、深呼吸の素振りしながら) 深呼吸、深呼吸。

とし (宮崎、雄一を見ながら) 何か変かね。

辰巳 さあ、練習すつか。宮さん、やっつて。

宮崎 (力なく) サーヨーイヤサ。ヨーヤーセ。ヨーヤーセ。

辰巳 どげんしたと。さっきより腹に力ん入っとらん。

陽平 (腹を摩りながら) 今は入れん方が、よかと思えます。

とし 何ね。そいは。

辰巳 (気づいて) ああ、そうやな。雄一、もう少し奥で練習ばせろ。

雄一 はい。

雄一・陽平 (わざとらしく) それがいい。そうしよう。そうしよう。

三人で奥へ出て行く。金、太鼓、囃子の音が聞こえる。ガラス戸を閉めると小さく聞こえる。四人、奥の方向を見る。

とし 本当に、大丈夫やろね？

辰巳 みんな頑張りよっですよ。これからでしょう。

宏二 (雄一が居なくなつて、急に元気になつて) おいの年のあと三つ上やつたなあ。

渋谷 そしたら何ね？

宏二 年寄りば出さんでおいが出たとに。

渋谷 そいは、よかねえ。

とし 本当ねえ。おばあちゃんも宏二の根曳き姿早う見たか。(長采に) 今からでも駄目やろか？。

渋谷 そいは良か手たい。

山城 (渋谷を見てから、としに) そりゃあ、無理でしょう。

とし 宏二やつたらでくつと思つとやけど。

山城 今から、宏二さんに代えたら、会長の孫ば無理に入れたつていらんことば言われますよ。

とし そいも、そうね。

山城 そいに、心配なかですよ。なあ、頭。

辰巳 おいがちゃんと面倒見ますけん。

とし そいならよかばつてん。何かあつたら、町の古株から責めらるつとは、うちの亭主やつけんね。

山城 会長には、恥ばかかせませんけん。

とし ほんと、頼むよ。

宏二 ばあちゃん、サザエさんの始まる。

とし あ、そうね、そいはいかん。早う帰ろう。そいじゃあ、お先に。明日、頼むね。

山城 お疲れさんでした。

辰巳 失礼します。

とし、宏二、帰つて行く。陽平、奥から出て、辰巳たちの方に来る。

渋笠 としばあさんは相変わらず、くんちにうるさかね。

山城 昔、「女のくんちに出れんとはおかしか。」て、みんなば困らせた伝説の人やもんな。
陽平 そがんですか。

辰巳 囃子で出れんやったけんで、今度は根曳きに出るてまで、言うたでしょう。

山城 そがんで聞いた。くんちの無かそこには嫁に行かんで、婿養子ば取ったとって。

辰巳 さっきの宏二ば根曳きにて、言うた時はびっくりした。

渋笠 あいは本心やったね。どがんなるかと思うた。

山城 なんば言いよつとか。亀さん、賛成しよつたやかね。

渋笠 社交辞令。

辰巳 本当、調子ん良かねえ。

陽平 すごか人ですな。

渋笠 あん、孫も相変わらす生意気かつたねえ。

陽平 こん前のくんちん時もすごかつたでしよ。

辰巳 そうやったねえ。

陽平 外から見よつて、思いよつたです。

山城 雄一がよう面倒見よつたね。

辰巳 金ば上手打てんやったけん、雄一が残つて、教えよつたとよ。

陽平 雄一はやつば、偉かなあ。

山城 宏二も雄一には頭の上がらんもんなあ。

陽平 そいで、さっきもおとなしゅうなつたとね。

辰巳 そいはよかけど、陽平、練習は？

陽平 (疲れた振りして) ちよつと休憩。

渋笠 さっき、行つたばつかりやつか。

山城 奥さんが何ば言おうが、おいたちには関係なか。

辰巳 そげんですよ。一生懸命、船ば回せばよかつですよ。

山城 一生懸命やるだけぞ。(陽平に向かつて) なあ、陽平。(言いながら奥のガラス戸の所へ行く)
(急にきびきびと) さあ、練習、練習。(ガラス戸の方に行く)

山城、ガラス戸を開ける。

山城 お疲れ。どうね？宮さん。

宮崎、雄一ガラス戸から出て来る。

宮崎 長采。

山城 何ね？

宮崎 おいにやるつでしようか？

山城 でくつでしよう。

渋谷 三十六歳のおいでん、きつかけんねえ。

山城 体力のことなら心配いらんでしよう。

宮崎 そげんですか？

山城 去年の暮れに根曳きの話ば持って行ったでしよう。

宮崎 ええ。

山城 あん頃から、家の近くの階段ば登り降りしよったじゃなかですか。

宮崎 どうして、知つとつとですか？

山城 近くば通つた時に見掛けたとですよ。

陽平 宮さん。偉かあ。

渋谷 誰でん、初めん時はすつと。

山城 あいば見てから、おいの目には狂いなかつたつて、思うとつたですよ。

宮崎 みんなに迷惑ばけんごと頑張ろうては思うとつとですけど。

渋谷 思うても、でけんこともあるけどね。

辰巳 そいは思いの足りんと。

渋谷 思いの足りんで、宮さんがでけん時はどうすつとですか？

辰巳 そんな時は、宮さんには悪かけど、変われば探さんばやろう。

雄一 宮さんの前でひどかあ。

渋谷 くんちは厳しかと。

陽平 偉そうに。

辰巳 みんなに言つとくぞ。宮さんに限らず、でけんやつは、おいが止めさすっけんな。

陽平 亀さんは危なかかも。

渋谷 何て。

宮崎 おいにくつやろうか？

山城 よか奉納踊りばするには、厳しか練習ばせんばでけん。

渋谷 そうそう。厳しかと。

山城 ばつてん。おいたちは好きで、くんちにづつとぞ。

雄一 はい。

山城 悔いの残らんごと、一生懸命すれば、結果はでると。

渋谷 長采は甘か。

山城 宮さん。くんちは良かですよ。いっしょに船ば諏訪の踊り場で思う存分回しましょう。

宮崎 はい。

山城 さあ、明日から、みんな気入れていくぞ。

辰巳 おい。みんなやるぞ。

みんな おお！

山城 よか、よか。そんな調子。じゃあ、明日。おやすみ。
みんな 失礼します。

山城、帰って行く。山城が出て行ったのを確認して、辰巳、すぐに腕時計を見る。

渋谷 頭、何か約束のあつとね。

辰巳 (時間が気になって、渋谷の言っていることが聞こえていない) ああ。(驚いた振りをして) もうこがん時間か。

陽平 そがん、遅かと？

辰巳 (陽平の言葉も聞いてない。急に思い出したように) あ、あいばすると忘れとった。帰ってせんば。悪かけど、先に帰るけん。

(雄一に向かって) 雄一後は頼むぞ。

渋谷 本当に帰つとですか。ここじゃなかとですか。(小指を立てる)

辰巳 (凶星でびっくりして) あんたもうるさかね。そいじゃあ。(帰りかけて) 雄一、わかっとるな。

雄一 はい、わかっとります。お疲れ様です。

辰巳、出て行く。

陽平 何ね？

雄一 何でんなか。

渋谷 また、『スナックかぶりつき』やろ。

陽平 ママ、きれか人やったな。

渋谷 なんで知つとつとか？

陽平 こん前、みんなで行つたと。

雄一 そんな話はよかけん。練習すつぞ。

三人、奥に出て行く。虎男、玲奈が上手から出て来る。

虎男 ああ、雄一の知り合い。

玲奈 大学の友達です。

虎男 友達、彼女じゃなかとね。

玲奈 いえ、まだ……。

虎男 まだてね。ふうん。着いたよ。

玲奈 ここが鯉川町のくんち小屋ですか。

虎男 そう。今、練習しよるやろう。

玲奈 邪魔にならないでしょうか？

虎男 よかさ、おいは帰るけん。

玲奈 どうもありがとうございます。

虎男、帰ろうとする。玲奈、入口に立って、入れないでいる。虎男、見かねて、玄関の戸を開けて中に入る。

虎男 今晚は。雄一居る？

渋笠 (奥を指しながら) 練習。トラも練習に来たとか。

虎男 おいがそがんことすんもんか。

玲奈に入るように促す。

虎男 遠慮せんでよかですよ。

玲奈、入って来る。

玲奈 今晚は。

渋笠 今晚は。

虎男 雄一。

虎男、呼びながら、奥に出て行く。

玲奈 練習なさってるんでしょ。お邪魔じゃないですか？

渋谷 いや、たいした練習じゃなかけん。雄一の彼女ね？

玲奈 いえ。大学が一緒で。

渋谷 東京の人？

玲奈 横浜です。

渋谷 都会の若っか子は違うね。

玲奈 はあ。(愛想笑いする)

渋谷 ここは練習したり、くんちの道具ば置いたりするけん、汚かけど、ごめんね。

玲奈 いいえ。くんちて有名な祭りなんでしょう？

渋谷 長崎くんちは、日本三大祭の一つ。その歴史は四百年続いとつとですよ。

玲奈 四百年も。

渋谷 姉さんは居つと？

玲奈 え、一人っ子です。

渋谷 そいは残念。

玲奈 え、どうしてですか？

渋谷 あんた、きれかけん。姉さんもきれかやろうね思うて。

玲奈 (話を逸らそうと) あの、くんちつてどんな祭りなんですか？

渋谷 残念、居らんとね。姉さん。居れば、案内したとに。

玲奈 (強い口調で) くんちはどんな祭りなんです？

渋谷 (声に気づいて) ああ、毎年、踊り町に決められた町が、諏訪神社に出し物を奉納すつとさ。

玲奈 そうなんですか。

渋谷 で、友達と一緒に来とらんと。

玲奈 来てません。(奥を見る)

渋谷 今度、来る時、友達も連れて来んね。おじさんが案内してやるけん。

玲奈 (気分害して) はあ。

渋谷 (機嫌を取るように) ええっと、くんちの出し物てわかるね？

玲奈 (冷たく) いいえ。

渋谷 町で違うとよ。踊りとか、曳きものとか、龍踊りじゃおどりとか。

玲奈 龍踊り。見たことあります。

渋谷 おいたちは川船ば奉納すつとよ。

玲奈 カワフネ。

奥から虎男、雄一、出て来る。その後に、陽平、宮崎が続く。玲奈、雄一の方に寄って行く。

虎男 亀さん。また、若つか子に手ば出したらいかんよ。

渋谷 馬鹿。待ってる間、お相手してたの。(玲奈に) ねえ。

玲奈、逃げるように雄一に近づく。

雄一 やつぱり、玲奈さん。

玲奈 来ちゃった。

陽平 今晚は。

宮崎 今晚は。

玲奈 今晚は。

虎男 そしたらおいは帰るけん。

渋谷 わいも練習していけ。

虎男 疲るっけん。そいじゃ。

玲奈 ありがとうございます。
雄一 トラにいさん、ありがとうございました。

虎男は「サーヨイヤサ。ヨヤーセ。ヨヤーセ。」と掛け声かけながら上手から帰って行く。

雄一 どうしたの？

玲奈 雄一君が大学休んでくんちに出るって聞いたから。

陽平 雄一。誰？こん人。

雄一 大学の友達。

玲奈 初めまして。松島玲奈です。

陽平 田島陽平です。

雄一 こちらは宮崎太一さんと渋谷亀夫さん。みんな根曳き仲間。

玲奈 ネビキ？

雄一 今度のくんちにだす出し物、川船を曳く人たちのこと。

玲奈 カワフネ、さつき、聞いた。

(威張って) 講義しとったとよ。

陽平 いろいろ聞きよったとじやなか？お姉さんは居らんかとか。

渋谷 馬鹿。何ば言いよつとか。

雄一 変なこと聞かれなかった？

玲奈 大丈夫。で、その川船って何？

陽平 そいはずね・・

雄一 長なごうなるけん、よか。(玲奈に向って、東京弁で) 連絡してくれば、迎えに行ったのに。

玲奈 急に決めたし、驚かせようと思って。

雄一 相変わらずだね。

玲奈 うれしくないの？

雄一　　そ、そりや、うれしいさ。

陽平　　なんか雄一、東京弁になつたらん。

雄一　　そんなことないさ。君たちはいいから、あっちで、練習しなよ。

渋谷　　女の力は恐ろしかとぞ。

陽平　　その意見には賛成。

雄一　　いちいちうるさいね君たちは。・・・(東京弁に気づき)うるさかね。わいたちは。

玲奈　　練習中じゃあないの？

雄一　　あ、うん。

玲奈　　それじゃ、ホテルに帰るね。

宮崎　　雄一君。後は三人でやるけん、よかよ。

雄一　　でも、明日小屋入りですから。

玲奈　　小屋入りって？

雄一　　くんちの練習が始まる日なのさ。本番終了までの、無事を祈って、諏訪神社と八坂神社に参拝に行くんだ。

陽平　　東京弁。

雄一　　(玲奈を見ながら)うるさいなあ、君たちは。静かにしろよ。(と言いながら陽平の顔を見て、気づいて)うるさかね。わいた

いちは。

渋谷　　その日は年番町ねんばんちょうや踊り町に、今日から練習を始めますって、囃子を打って挨拶回りばすつとよ。こいば打ち込みうちこみて言うりたい。

宮崎　　そげんですか。

渋谷　　宮さん、知らんかった？

陽平　　亀さん詳しかね。人は何か取り得があつとね。

渋谷　　何て。(陽平を睨む)

玲奈　　くんちでいろいろあるのね。

雄一　　うん。そうだ。奥に七年前のくんちの写真があるけど、見る？。

玲奈　　見る、見る。

雄一、玲奈と奥のドアから出て行く。洪笠、陽平がドアの方を見る。

洪笠 (陽平に) 見る？

陽平 見る見る。

陽平、洪笠、ドアの所まで走って行き、覗こうとする。

陽平 二人つきりって羨ましか。

洪笠 雄一、手の早かごたるけど、大丈夫かな。

宮崎 大丈夫でしょう。それよか、練習しましょうか。

千恵子が入って来る。陽平、洪笠慌てて、ドアから離れる。

千恵子 今晩は。

みんな 今晩は。

千恵子 うちの人、来てる？

陽平 (慌てて) いえ、さっき帰ったですよ。

千恵子 そう、じゃあ、やっぱり、雄一と飲みに行ったんだ。

洪笠はにやにやし、宮崎、陽平の二人は「え！」と困って、お互いに奥のドアを見る。

千恵子 (三人を見て) どうかしたと？

陽平 いえ、何でんなかです。

宮崎 あおう、初めまして。今度、根曳きをする宮崎です。

千恵子 初めまして。辰巳の家内です。

宮崎 頭には、いつもお世話になってます。

千恵子 いえ、ご迷惑かけてるんじゃないですか？

宮崎 いいえ。こっちの方こそ。

千恵子 頭になって、張り切っとつとですよ。

陽平 そげんですね。

千恵子 張り切り過ぎて、みんなに迷惑かけんやったら、よかけど。

渋谷 おいがサポートしますけん。

千恵子 口先だけじゃ、だめよ。渋谷さん。

渋谷 ひどか。

節子が玄関口に立っている。

節子 今晩は。

みんな (みんな節子の方に向く) 今晩は。

宮崎 何ね？入らんね。

陽平 宮さんの奥さん。

千恵子 ああ、そうなの。

宮崎 (節子に) 頭の奥さん。(千恵子に) うちの家内です。

節子 初めまして。よろしくお願いします。

千恵子 こちらこそ、よろしくお願いします。

節子 何度もすみません。

宮崎 何か用か？

節子 会社から電話があつて、早急に連絡してくれって。

宮崎 携帯にかけたらよかやろ。

節子 でも、何度かけても出ないから。

携帯電話を見た宮崎は着信していることに気づく。

宮崎 わかった。(みんなに向かって)すみません。ちょっと行って来ます。

宮崎、節子と出て行く。

千恵子 そいで、うちの旦那は何時頃行ったと？

陽平 (即座に答える) さっき。

千恵子 『かぶりつき』に行っとらんやろね。

陽平 (不安げに) 多分、行ってないと・・・

千恵子 多分？

陽平 (慌てて) 絶対、行ってません。

陽平、困って渋笠の顔を見る。渋笠、にやにやしている。

千恵子 渋笠さん。何ば、にやにやしよつと。

渋笠 あ、いや、何でんなかですよ。

千恵子 ねえ。早よう帰ること言っとつた？

陽平 (即座に答える) 言っとつたです。

千恵子 本当？

陽平 はい。

渋笠 (陽平に聞こえるように独り言で) 閉めて、早う帰ろうかなあ。

陽平 そう、そいが良か。さあ、帰りましょう。

千恵子 何ね。何か、急ぎの用事のあつとね。

陽平 あるような、無いような。

洪笠 おいは良かとぞ。ゆつくり居っても。陽平。

陽平 あ、いや、そいは……。

雄一と玲奈が奥から出て来る。

雄一 そうなんだ。

玲奈 そうなのよ。

千恵子 (びっくりして) 雄一。

雄一 (びっくりして) あ、おかみさん。

千恵子 うちん人と、一緒じゃなかと？

雄一 え、ああ、いや、その、今……

陽平 雄一、まだ、居ったとか。

陽平、雄一に話を合わせるように目で合図する。

千恵子 まだて？

雄一 (不安げに) ああ、まだ、居ったとですよ。

陽平 もう頭の所へ戻ったと思うとった。ねえ、亀 (慌てて言い直す。) 洪笠さん。

陽平、洪笠を見る。洪笠、にやにやしている。

洪笠 そうやったかなあ。

千恵子 どういうこと？

陽平 ああ、さつき、東京から松島さんが来て。

千恵子 松島さん？

陽平 雄一の大学の友達。(玲奈に) こちら、頭の奥さん。

玲奈、よくわからないが、千恵子にお辞儀する。千恵子もお辞儀する。

千恵子 そいで、どうして雄一がここに居つと。

陽平 おいが店に連絡して・

雄一 (急に元気になって) そう、そう。玲奈さんが来たつて、陽平から呼び出しがあつて。

陽平 おいが電話しました。

千恵子 どこから？

陽平 (困つて) ここから。

千恵子 ここからで、ここに電話なからう？

陽平 ああ、いえ・、携帯で。

千恵子 陽平、携帯持つとつた？

陽平 いえ・、洪笠さんの。

洪笠 (びっくりして) おいの携帯。

千恵子 よう貸したね。ケチの洪笠さんがあんたに。

洪笠 ケチで、ひどか。

陽平 洪笠さん。女ん子に優しかけん。

千恵子 怪しかねえ。まあ、ええわ。雄一、で、頭は、どこで飲んどると。

雄一 はあ・・。

千恵子 どこ？

雄一 どこで。

千恵子 さっきまで居た店わからんと？

雄一 座つたらすぐに出て来たから。

千恵子 まあ、よかたい。帰ってきたら・・・(腕捲りする)

波笠 明日の小屋入り楽しみやな。

千恵子 うるさかね。

玲奈 あろう。

千恵子 ごめんなさいね。変なとこ見せちゃって。(波笠、陽平、雄一を睨み、玲奈に笑顔で) 長崎には旅行に？

玲奈 いえ、雄一君が大学休んでまで、くんちに出るって聞いて、どんな祭りか興味があつて。

陽平 興味は祭りだけじゃなかごたつですけど。

雄一 君、一言多いよ。

千恵子 雄一、どうしたと、そんな喋りは。

雄一 どうしたって。おかしいですか、おかみさん。

千恵子 おかしか。

玲奈 ねえねえ。頭って？

雄一 船を回す根曳き衆の一番偉い人。その人の言うことは絶対さ。

玲奈 そうなんだ。さつきすれ違った人かな。

雄一 すれ違ったの。

玲奈 ええ、虎男さんが、挨拶してた。「頭、これからかぶりつきですか。」って。

陽平・雄一 ああ！

千恵子 どういう事ね？

陽平 どういう事で聞かれても。

千恵子 あん人は、あん店には行かんて、約束したとに。

陽平 あんママん所へでしょう。きれかママさん。

雄一 陽平。

千恵子 あんたたちは。そろいもそろって。うちば・・・

波笠 おいは、違うですよ。おいは言おうてしたけど、陽平が。

玲奈 私、失礼します。雄一君、送って。

雄一 あの、僕、玲奈さんをホテルまで送ってきます。
陽平 おいも連れてって。

雄一、玲奈、陽平、慌てて出て行く。

千恵子 あんた、にやにやしとったね。

渋谷 あ、いえ、そいは・・・。

千恵子 よかよ。帰って来たら、とっちめてやるけん。

渋谷 頭もいかんですね。こがん、きれいか奥さんば悲しませてから。

千恵子 調子よかごと言うて、あんたも許さんけんね。

渋谷 そんな。おいからも頭には注意しますけん。

千恵子 信用でけん。

渋谷 そんな。

千恵子 そいにしても、うちの人も何で行くとやろうね。

渋谷 明日から、くんちんために精進せんば、いけんけん。

千恵子 そいけんなんね。

渋谷 そんな前によつと、つまみ食い。

千恵子 なんば言いよつとね！

渋谷 冗談、冗談で。頭は、そげんことなかよ。

陽平、花子が上手から出て来る。

陽平 花子ちゃん、やっぱ、おいは、帰った方がよかと思う。

花子 どうして、一人で行くと嫌やけん、いっしょに来て。お願い。

花子、陽平を引っ張りながら玄関に入る。

花子 今晩は。

千恵子 今晩は。

陽平 (困って) やっぱり、いらつしやったとですか。

千恵子 いらつしやったとですよ。

花子 どうかしたと？

陽平 え、いや、その・・・。

千恵子 何ばしたとやったかなあ。

花子 何ばしたと？

陽平 そいは・・・。

渋笠 陽平、おいは帰るけん。

陽平 え、一人にせんでください。

千恵子 逃げると？

渋笠 明日の準備のあつと。じゃあ、お先に。(出て行きながら) 触らぬババアに祟りなし。

陽平 おいも帰ろうかな。

千恵子 陽平、逃げるな。

花子 何ばしたとですか？

千恵子 男どもの悪巧み^{わるたくみ}。

花子 悪巧み？

陽平 おかみさん。すんませんでした。

千恵子 もうよかよ。

花子 何、何、悪巧みって？。

千恵子 たいしたことじゃなかと。

花子 気になるなあ。

千恵子 花ちゃん、今頃なんね。

花子 え、みんな練習しよるて聞いたけん。

千恵子 雄一に会いに来たとやろ。

花子 いや、そげんことなかもん。

花子は雄一を捜す素振りをみせる。

千恵子 みんな帰ったよ。

花子 そうですか。雄一も……

千恵子 陽平。一緒やったろ。

花子 一緒やったと？

陽平 ああ、ううん。途中まで。邪魔んごたったけん、別れたと。そしたら、花ちゃんに会うて。

花子 何、邪魔て？

陽平 ああ、いや、何でんなか。

千恵子 そうかなあ。

陽平 おかみさん。

千恵子 嘘はいかんよ。黙っとったって、わかることたい。

花子 何ですか？

千恵子 大学の友達。松島さん、やったかな。くんちに雄一が、大学休んでまで、出るって聞いて、会いに来たって。

花子 松島さん……

陽平 ただの友達て。

花子 なんね。みんな何ば誤解しよつと。うち、雄一のこと何とも思うとらんよ。勘違いせんで。

花子、陽平と千恵子の顔を見て

花子 私、帰る。さようなら。

花子、出て行く。

陽平 女て難しかですね。

千恵子 何だね。

陽平 そいけん、好きになつとかな。

千恵子 何ば言いよつとね。

陽平 でも、頭も雄一もよかなあ。

千恵子 どうして？

陽平 女に持てて。

千恵子 そがんくだらんことば、言いよつて良かとね？明日、小屋入りばい。

陽平 はい。

千恵子 陽平ちゃんは初めてやったかな？

陽平 七年前に出たかつたとすけど。

千恵子 そうやったね。家のいろいろあつたけんね。

陽平 父ちゃんがリストラにおうて、くんちどころじゃなかつたけん。

千恵子 くんちに出らるつとも、巡り合わせやもんね。

陽平 雄一たちば見とつたら、羨ましゆうて。そいけん、七年後は絶対出るぞつて思つて、頑張つたとす。

宮崎入つて来て、陽平の話を聞いている。

宮崎 七年待つたとすか？

陽平 宮さん、みんな帰つたですよ。

千恵子 願いのかのうてよかつたね。

陽平 はい、うれしかです。思いつき演技ばして、モッテコイの掛け声ば聞きたかです。

千恵子 そうやね。楽しみたいね。がんばってね。うちの人は助けてやってね。

陽平 はい。頭は絶対ですけん。

千恵子 そやけど、悪かことばしようとしたら、私に教えるとよ。家では頭より偉かとやけん。

陽平 でも……。

千恵子 冗談よ。それじゃ、失礼するね。お疲れさま。

高・驥 失礼します。

千恵子、出て行く。

宮崎 みんないろいろあつとね。

陽平 はい。

宮崎 そいけん頑張つとかな。

陽平 はい。くんちは出るもんです。

宮崎 くんちは出るもん。

陽平 出れる、おいたちは幸せもんです。

宮崎 そうやね。頑張らんと、罰ばちがあたる。

陽平 宮さん。頑張らしよう。

宮崎 陽平君、頑張らうな。

陽平 陽平君は、おかしかです。陽平て呼んでください。

宮崎 そうか。じゃあ、陽平。

陽平 はい。宮さん。

宮崎 根曳き、頑張らうな。

陽平 はい。頑張らしよう。

宮崎・陽平 明日は小屋入りか。

掛け声と囃子の音が聞こえてくる。サーヨーイヤサ。ヨーヤーセ。ヨーヤーセ。徐々に暗転となる。

一場終了

二場

八月の下旬。鯉川町のくんち小屋。部屋には町内の町旗は無い。弓張り堤灯は壁に掛けてある。壁には練習用の采さいが立て掛けてある。千恵子、花子、玲奈が練習後の話し合いの後片付けをしている。

千恵子 折角せっかくの夏休みなのに、悪かね。

玲奈 いえ、楽しいです。

千恵子 でも、もう、帰らんばやろう。

玲奈 どうして？

千恵子 夏休み終わるけん。

玲奈 いいえ。九月いっぱい休みですから。

千恵子 最近の大学はそがん休みのあつとね。良かねえ。

玲奈 ねえ、花子さん。

花子 (ぶっきらぼうに) そがんですね。

玲奈 どうかした？

花子 (話題変えるように、千恵子に) 反省会、揉めとつたですね。

千恵子 中々回らんごたるね。

玲奈 マワルてなんですか？

千恵子 川船をくるくる回すと。

花子 中心ば動かさんで回るて、難しかとでしよう？
千恵子 ここは、走りば止めんで回すけんね。
玲奈 ハシリて？
花子 何も知らんとね。
千恵子 船ば前後に速く動かすことば、走りて言うतोよ。
花子 ゆっくり歩くごと動くとば、道行みちゆきつて言うतो。
玲奈 そうなの。
花子 走り、回しの、決まったら、かつこよかもんね。
千恵子 うちん人は絶対、成功させるつて。
玲奈 頭つて、大変なんですな。
千恵子 そいばつてん、そいが楽しみんごたるよ。
花子 羨ましか。
千恵子 花ちゃんは囃子で出たとかな。
花子 うちたちの時は女は出れんやつたけん。
玲奈 それつて、男女差別ね。
千恵子 昔はね。今は町に子供の少なかけん。女ん子でん、出れるけどね。
玲奈 練習は、いつまであるのですか？
千恵子 来月の終わり頃かな。
玲奈 くんちの前までやらないの？
花子 船の飾り付けやら、庭見にわみせせ、人数揃にぞろいいのあるけんね。
玲奈 ニワミセ、ニゾロイ？
千恵子 庭見せてね、十月三日の夕方から、踊り町の町内であるとよ。

三郎が発電機を持って、玄関から入って来る。

三郎 今晩は。

花子 あ、三郎。

千恵子 まだ、仕事ね？

三郎 発電機の油の切れとったけん、入れて来たつです。

千恵子 明日でも良かったやろうもん。

三郎 明日の練習は諏訪神社やけん。出発の早かけん。

千恵子 そうね、ありがとうね。

玲奈 町のみなさんの協力。すごいですね。

三郎 はあ。

千恵子 三郎、初めてやったかな。

三郎 ええ。

千恵子 雄一の大学のお友達の松島玲奈さん。夏休みで、横浜から、わざわざくunchiば手伝いに来てくれたとよ。(玲奈に) こいは三郎、浪人生。そいで、くunchi出れんやったと。

三郎 (千恵子に) そがんこと言わんでよかろうもん。(玲奈に) 初めまして。

玲奈 今晩は。大変ですね。

三郎 いやあ、くunchi馬鹿やつけん。でも、あんたも、そうとうくunchi好きんごたる。

玲奈 くunchi馬鹿かな。

花子 今、玲奈さんに庭見せの説明ばしよったと。

三郎 え、庭見せの話。

千恵子 三郎の顔、見たら思い出した。栗まんじゅう事件。

花子 本当、あつたあつた。

三郎 俺ってタイミング悪ー。

玲奈 何ですか？栗まんじゅう事件て？

千恵子 庭見せの時にね。奉納踊りに出る人たちの衣装や小道具ば並べたりするとやけど、そんな時に、親戚や知った人から贈られたお祝い品ば飾り付けると。

花子 お祝いの品って、いろいろあるとよ。お祝いのお金でしょ、お酒でしょ、鯛や伊勢エビやサザエ。そんなのひとつが大きな栗

まんじゅう。長崎で有名かとよ。

三郎 物心つくまえない。

花子 え、小学校6年生が。

千恵子 わんぱくやったもんね。三郎は。

花子 そんな大きな栗まんじゅうを飾る前に齧かじったとよ。

玲奈 お腹すいてたの？

三郎 違う！みんなが中身ば黒餡あんて言うけん、おいは絶対、白餡あんて言うたら。そしたら、「証明せろ」てみんなが言うけん。ガブツて。

花子 (千恵子に) あれ、頭のお花やったよね。

千恵子 そう。飾ると、どうしようか相談されて。「もらったけん、飾らん訳にはいかんでしよう。」て言うて。小さいか栗まんじゅう

三郎 ばってん、そいが縁で頭と仲よくなつたとでしよう？

花子 初耳。

千恵子 そがんこと忘れた。

玲奈 庭見せから始まる恋か・・・？

三郎 (玲奈を見ながら) 庭見セラブ！

玲奈 私もお手伝いします。

花子 え、また、来ると。学校のあるやろう。

玲奈 休めばいいのよ。人生の課外授業よ。

三郎 そいはよか。雄一も喜ぶさ。

花子 え、でも慣れん人がすると大変かよ。

三郎 花ちゃん、教えてやれば良かやつか。

千恵子 (三郎の無神経さにあきれて) 三郎、発電機、奥に持って行こうか。

三郎 あ、はい？

千恵子、三郎と奥のドアから出て行く。花子は庭見せに玲奈が来ることを気にしている。

玲奈 やっぱり、私には手伝い無理かな。

花子 そげんことなかけど。

玲奈 さつき、「お花」って、言ってたけど、何のこと？

花子 お祝いんこと。

玲奈 お返しとかするの。

花子 え、花御礼はなおんれいのこと。

玲奈 花御礼で言うんだ。くんち用語っておもしろい。

花子 (少し元氣なく) そげんかなあ。

玲奈 どうかした？

花子 玲奈さんともお祭りあると？

玲奈 ないなあ。

三郎が出て来る。

三郎 じゃあ、長崎の人と結婚すればよかたい。

玲奈 それは、いいかも。

花子 (大声で) だめ！

三郎 どうしたと。びっくりした。でも、玲奈さん、偉かあ。

玲奈 そんなあ。

三郎 せっかくやけん、長崎ん夜でん楽しんでんだらよかとに。

玲奈 いいえ、好きなんです。こういうの。それに、自分も祭りに参加してるって気になるし。

花子 部外者が出入りすつとば嫌う人もおつとよ。迷惑やて。

玲奈 え、そうなの。雄一君が言ってた？

花子 そうじゃなかけど。

三郎 玲奈さん、気にせんちゃ、よかよ。くんち馬鹿同士、仲良くしましょう。

三郎、握手を求めてくる。玲奈、困ったそぶりをしながら、ゆっくり手を出す。

玲奈 え、はあ。

三郎、うれしそうに握った手を振る。千恵子、出て来る。

千恵子 三郎、まだ居ったとね。(三郎、玲奈の握手を見て) 何ば、しよつと。

三郎 (手を離しながら) え、そげん言わんでよかやなかですか。折角、お友達になりよつとに。

花子 玲奈さん、迷惑やて。

玲奈 そんなこと、ないけど。くんちのこと知らないし、いろいろ教えてもらって、楽しいです。

三郎 ほらあ。他に何かわからんことあるね。

玲奈 ええと。ああ、さっきの人数揃いつて何ですか？

三郎 十月四日に町内で奉納する演技ば披露すつとさ。

千恵子 リハーサルみたいなものね。その日に初めて、みんな本番の衣装ば着るとよ。

玲奈 それじゃあ、着物着て船曳くのつて、本番前、一回なんだ。

千恵子 そうね。着物汚れても困るし。

玲奈 でも、ゲネプロみたいに前の日にすればいいのに。

三郎 何ね？ゲネプロて？

花子 クラシックとかバレエとか、発表ん前に総稽古ばすつと。そいばゲネプロて言うつと。三郎には縁のなかるうけどね。

三郎 失礼かぞ。花ちゃん。

千恵子 でも、本番までに二日の余裕があるつて、昔の人の知恵よね。

玲奈 どうしてですか？

花子 前にね。うちたち、川船でしょう。奉納で網打ちばすつとよ。

玲奈 この前、写真見せてもらった。船の上から子供が、網で下に置いた魚獲るやつ。

千恵子 あれ難しかとよ。

玲奈 船頭さんは小さかったみたいだけど。

花子 そう小学校の低学年かなあ。それで、人数揃いときに初めて、衣装は着るやろう。

三郎 敏坊んことか。

千恵子 網が引つかかったとよ。

花子 そう。投げる時にね、衣装に引つかかって。みんな心配したとよ。

玲奈 で、どうなったの？

三郎 本番まで、2日あるけん。そん間に、練習して。

花子 みんな心配して、練習見よつたですな。

千恵子 でも、それで、みんなの気持ちが一つになったごたるよ。

玲奈 それで？

三郎 本番は見事やった。網は大きく開いて、鯉は全部入るし。

花子 本当。涙んでた。

千恵子 あいが、本番の前日やったら、失敗しとつたやろうね。

玲奈 昔から続いているものって、何か意味があるのね。

三郎 そう、そこが、くんちのすごかところさ。

玲奈 よ、くんち馬鹿。

三郎 ありがとよ。

千恵子 玲奈さんまでノツて。さあ、もう十一時よ。

三郎 え、もうそげん時間。朝七時から引越しの梱包やった。

千恵子 また、家ん手伝いね。

玲奈 家の手伝い？

花子 引っ越し屋さ。

三郎 おやじの「勉強ばっかりしても、頭に入らん。時には体ば使え」って。

千恵子 浪人生も楽しやなかね。

三郎 本当。そしたら。

みんな お疲れ様。

三郎、玄関から出て行く。

千恵子 じゃあ、洗い物しようか。

千恵子が下手のドアから出て行く。後に続いて玲奈が出て行こうとする時、花子が玲奈に声をかける。

花子 あのうち、玲奈さん？

玲奈 はい。(振り返って花子を見る)

花子 あのうち、玲奈さんは雄一と……。

玲奈 え？

花子 あ、いや、よかと。

玲奈 よかって？

花子 大したことじゃなかと。ただ、雄一と同じテニス部かなあて。

玲奈 本当？

花子 違うと？

玲奈 そうよ。学部は違うんだけど、クラブが一緒で、知り合ったの。

花子 雄一、テニスうまろう。

玲奈 うん。最初見た時、びっくりしちやって。県代表でインターハイに出たんだって。

花子 そうよ。こん町の誇りよ。

玲奈 花子さんの誇りじゃないの？

花子 それ、どういう意味？

玲奈 高校の時、仲良かったんでしょ？

花子 え、どうして？

玲奈 この前、部屋で、いっしょに写った写真見せてもらったのよ。

花子 え、写真？

玲奈 県大会優勝した時かな。みんなで一緒に撮ったやつ。

花子 ああ、あれ。

玲奈 他にもあるの？

花子 え、ううん。でも、玲奈さん、よく雄一の部屋に遊びに行くよ？

玲奈 え。あの時はクラブのみんなで行ったのよ。誤解しないでね。

花子 え、いえ、誤解なんて。

玲奈 写真、良く撮れてて、彼女って感じ。

花子 そげんことなかよ。

玲奈 じゃあ、花子さんは雄一君と付き合っていないの？

花子 付き合うって・・・幼なじみやけん。

玲奈 (念を押すように) 幼なじみね？

花子 え、どげんかした？

玲奈 雄一君はただの幼なじみだって、言ってたけど。ほら、女の子の気持ちってわかんないでしょ。

花子 雄一がうちんこと、ただの幼なじみって。

玲奈 違うの？やっぱり、本当は雄一君のこと、好き？

花子 何で？

玲奈 女の感。

花子 そがんことなかよ。玲奈さんの方こそ好いとつとじやなかと？

玲奈 え…。

花子　じゃあ、好きじゃなかと？

玲奈　そんなことないよ。

花子　好いとつと？

玲奈　最近、雄一君のこといいなあつて。

花子　（元気なく）そう、付き合つとつとね。

玲奈　付き合つてると言えるのかなあ。

花子　違ふと？

玲奈　雄一君の気持ち、よくわかんなくて。

花子　みんなに、優しかけんね。

玲奈　そう、ただの友達なのかなあつて。

花子　うちもそうやつた。

玲奈　え？

花子　ううん。

玲奈　花子さん、どうかした？

花子　ううん、うちは、ただの幼なじみやつたとか。

玲奈　花子さん？

花子　千恵子さん、手伝わんば。

花子、奥のドアから出て行く。後を目で追う玲奈。それを見る虎男。

玲奈　花子さん。

虎男が玄関から入って来る。

虎男　オッス。

玲奈 今晩は。

虎男 あんたも、真面目かね。

玲奈 好きですから。

虎男 雄一を。やろう？

玲奈 虎男さん、嫌い。

玲奈、奥のドアから出て行く。

虎男 都会の女の扱いは難しか。

洪笠が入って来る。

洪笠 女の扱いが何て？

虎男 あれ、亀さん、帰ったとじゃなかと？

洪笠 女んことで悩みのあれば、おいに聞け。

虎男 よか。おいは誰かんと別れとうなかもん。

洪笠 何て。

宮崎、陽平、雄一が入って来る。

雄一 二人とも来とつたのですか。

陽平 珍しか組み合わせ。

洪笠 船回しのは、おいのおらんば解決せんやろう。

虎男 今日は悪すぎた。

宮崎 うまくいかんやっただすね。

雄一 どがんしたらよいか。

陽平 きつかあ。反省会は終わったとに。

辰巳、山城が入って来る。

辰巳 帰ってもよかとぞ。陽平。

陽平 そう言う意味じゃ無かとはってん。

辰巳 長采、どこの悪かて思いますか？

山城 初めやけん。これからやろう。

虎男 中心のずれとった。

宮崎 回転の中心ですか？

虎男 そうさ。センターがしつかり押さえてもらわんと。

波笠 陽平、力抜いとつとじゃなかか？

陽平 一生懸命やりよっです。

虎男 やつとつても、できんやつたらだめさ。

宮崎 おいが悪かとでしようか？

雄一 よう頑張りよっですよ。

波笠 年の割にはやる。

虎男 年は関係なか。

雄一 年のことは言うたらん。

虎男 できるか、できんかたい。

波笠 そうりやそうだ。

雄一 練習初まったばかりやる。

虎男 初めが肝心や。

雄一 トラにいさん。陽平も宮さんも一生懸命しよるよ。

虎男　　そいけん、何ね？

雄一　　何ねて。

辰巳　　初めてのもんも居るけん。すぐには、でけんやろう。

虎男　　よか奉納ばしたかけん。言いよつとさ。

雄一　　そいはみんないっしよたい。

山城　　もうよか。わかるね？宮さん。

宮崎　　何かイメージのつかめんて。

山城　　そうか。そんな机ば船て思うてちよつと着いてみる。

雄一、陽平、宮崎が長机を部屋の中央斜めに持って来る。

辰巳　　（奥の机の端を指し）左舷の先頭はこつち。

辰巳、机の左端に着く。

山城　　トラ、右舷先頭に着け。雄一は船尾、亀さんは左舷中央、宮さんは右舷中央。陽平上に乗れ。着いてみる。

みんな言われたように机に着く。

山城　　走りから回すぞ。言うとかばってん。本気ば出すなよ。勢いのついて怪我すつけん。

渋笠　　おいは怪我しとうなか。抜けてよかやろうか。

辰巳　　亀さん。バランスとれんけん。みんなゆつくりぞ。

ヨヤセ、ヨヤセ、掛け声掛けながら、前後に動く。2回前後に動いて、後ろから前に動いた時、山城がパンと手を叩く。みんなヤーと声を出して、右に回り始める。二回ゆつくり回る。回りながら右にセンターがずれる。

山城 やめ。

みんな止まる。

山城 回る瞬間の形ば作ってみろ。

みんなその形をとる。

山城 頭。

辰巳、机から離れて、山城の所に来る。

山城 どうや？

辰巳 もっと重心ば落とした方がよかとじゃなかですか。

山城 亀さん。

渋谷 何ね。

山城 前回、宮さんのとこやったよね。

渋谷 ああ、そうばってん。

山城 ちよっと代わって。

宮さんと亀さんが代わる。

山城 一回、走りばして、回すところで止めて。宮さん、頭のところに入って。陽平、亀さんとこ。

宮崎・陽平 はい。

みんな、ヨヤセと掛け声掛けながら、前後に動き、山城のパンと叩く手の音を聞いて、ヤーと声を上げ、回す体制になって、止まる。机は床に置き、形だけ示す。

山城
頭どうや？

辰巳
確かに、こっちの方がセンター決まるごたっですね。

渋笠
当然たい。

宮崎
どがんすつとですか？

山城
宮さん来んね。亀さんしてみて。

渋笠、回しの形を作る。宮崎、長采の横に来て、見る。その後、渋笠さんの横で形を作る。

宮崎
こうですか？

辰巳
こうかな。

辰巳、宮崎の形を直す。渋笠、机から離れて、それを見ている。

渋笠
宮さん。もっと踏ん張らんと。

宮崎
こうですか？（宮崎、腰を低くする）

もつとき。

宮崎
こうですか？（腰を低くするが、最後には腰をつく）

渋笠
やっぱ、年寄りには無理ばい。

陽平
亀さんひどか。

虎男
そんなくらいで、ふらふらして、頼りんなかね。

雄一　そがん言わんでよかでしょう。

辰巳　もう、よか。

虎男　ほんとに大丈夫やろか？

辰巳　船は十六人の根曳きで回すとぞ。

山城　みんなの気持ちが一つにならんとぞ。

虎男　わかつとつです。

陽平　そがん言うなら、みんな、ここに集まるべきじゃなかとですか？

雄一　陽平。

宮崎　おいもそう思います。根曳きの他の連中も来るべきじゃなかとですか？

陽平　そうですよ。

渋笠　新人さんがいつちよまえに言いよるばい。

辰巳　わいたちのごと、恵まれとる奴ばかりじゃなかとぞ。

雄一　そがん言うても。

辰巳　あいたちも、ここに来て、わいたちと船回しの話ばしたかさ。ばつてん、みんな、生活のあつと。くんちに出るために、みんな頑張りよつとぞ。

陽平　じゃあ、采振りの四人は何で来んとですか？

宮崎　来てほしかです。

渋笠　みなさん、お疲れで、お休みなんでしょう。

山城　亀さん。さつきも言うたごと、船回しは十六人の気持ちが一つにならんと成功せん。同じように奉納踊りは采振り、根曳き、囃子の気持ちが一つにならんとうまくいかん。そんなために、毎日練習しよつとぞ。

虎男　わかつとつです。

山城　わいたちは一生懸命、船ば回せばよか。ばつてん、練習の手配ばしたり、船の整備ばしてあるけん、でくつとぞ。誰いがしよつかわかつとるやろうね。

雄一　長采と采振りです。

山城　衣装合わせの準備ばしたり、お金の計算ばしたり、面白なか仕事ば練習の終わってから采振りはしよつとぞ。

宮崎　　そがんでしたか。

山城　　そいだけじゃなか。練習の時の交通整理や場所の照明の手配、練習の世話、町のみんなの協力があつて、おいたちは練習でくると。

辰巳　　三郎もようしよる。

山城　　よかか、おいたちだけが、くんちに出るとじゃなかとぞ。手伝つてくれた町みんなの気持ちといっしょに出ると。そいで、初めてよかくんちのでくつとぞ。

宮崎・陽平・雄一・虎男・辰巳　　はい。

山城　　みんなでいろいろ意見ばいうとは良か。ばつてん、個人攻撃はいかん。おいも、なあなあは好かんけん、厳しか意見は、どんな言うてよか。ばつてん、相手ば思いやる気持ちば忘れたら、よか奉納はできん。みんなの気持ちば、明日の練習につなげようで。

根曳きみんな　　はい。

山城　　亀さんもよかか？

渋笠　　（渋笠もしぶしぶ）はい。

山城　　そいじゃ、采振りのところにもどるけん。頭、頼んだぞ。

辰巳　　はい。

根曳きみんな　　お疲れさんです。

山城が出て行く。陽平、宮崎、雄一が机を　元の位置に戻す。千恵子、玲奈が奥から出て来る。

辰巳　　おう、おったとか。

千恵子　　また、戻ってきたと。折角、片付けたとに。

辰巳　　後はよかけん、早う帰れ。

渋笠　　あれえ、玲奈ちゃんやなかね。どげんしたと？

玲奈　　夏休みで、遊びに来たんです。

千恵子　　来てすぐに、手伝うてくれよつと。

辰巳 悪かねえ。ありがとう。

玲奈 いいえ。こちらこそ、ご迷惑じゃ、ないですか？

虎男 そがんことなかさ。きれか人は大歓迎。

渋谷 トラもよかこと言うやつか。

虎男 雄一、よかなあ。帰って、マッサージしてもらおうとやる。

玲奈 そんなことしないで。

雄一 トラにいさん。

虎男 怒るな。冗談。玲奈さん、ごめんな。

渋谷 玲奈ちゃん？

玲奈 はい。

渋谷 お友達は？

玲奈 一人で来ました。

千恵子 亀さん。(玲奈に) そがんこと答えてよかよ。早う帰ろう。ここに居たら、また、何て言わるっかわからん。

玲奈 はい。

陽平 雄一。送れば？

辰巳 おう、雄一。送って来い。

雄一 あ、いや、でも、さっきの話の続きもあるし。

玲奈 大丈夫です。ひとり帰れます。

虎男 おい、帰る。

辰巳 まだ、話のあるやろうが。

虎男 もうよかやろう。疲れた。玲奈ちゃん。帰ろう。

陽平 雄一、よかとや？

雄一 船回しの話のあるけん。

玲奈 さようなら。

虎男 じゃあな。

玲奈、出て行く、それを追うように虎男、出て行く。

辰巳 トラ、相変わらずやな。雄一。よかったとや。

雄一 (元氣なく) はい。

辰巳 そうか。(根曳きのみんなに) さっきの話の続きやけど。回しもそうやけど、走りも、もっとスピードださ
んば。

宮崎 はあ。

雄一 じゃあ、もっと、突っ込んでよかとですね。

辰巳 長采に当たるぐらいに突っ込まんばさ。

陽平 危なかとじゃなかですか。

汐笠 そのくらいせんと、迫力はでらんさ。

辰巳 ちゃんと聞いとつとか？雄一。

辰巳 練習はいつも真剣勝負ぞ。

宮崎 走りから回しに入るタイミングのわからんのですが。

汐笠 ヤーて声ば出すやろが。そいから回すとき。

宮崎 ヤーて言うてから回す。

辰巳 そんな時に真ん中ばすぐに押さえんばとぞ。

宮崎 押さえよるつもりばってん。

辰巳 雄一。

汐笠 心、ここにあらず。

陽平 亀さん。

千恵子 (玲奈に) 玲奈ちゃん。待って。

千恵子 (ドアに向かって) 花ちゃん。帰ろう。

花子 (奥から) あ、もうちよつとかかるから、先に帰って
ください。

千恵子 そう、じゃあ、先に帰るね。

花子 (奥から) はあい。

千恵子 雄一、花ちゃん、ちゃんと送ってよ。

雄一 おい？

千恵子 そう。頼んだよ。

雄一 遅うなると思うけど。

雄一 ああ、はい。

千恵子 花ちゃん、待つとるさ。たまには送ってやらんね。

雄一 はあ。

千恵子 はあ、て何ね。

雄一 待つてもらおうと悪かし。

千恵子 女ん子、一人で帰すと危なかやろう。

雄一 ああ、はい。

雄一 ああ、走りのセンターが決まつたらんごたる。

辰巳 走りながら、前と後ろで合わせんばさ。

陽平 雄一、送ってやれば。

雄一 よかけど。陽平、おまえが送れ。

陽平 おいじゃ、だめやろう。

辰巳 おう。今日は話の長ごうなるかもしれんけん。遅うなつぞ。

みんな お疲れ様でした。

千恵子、出て行く。

宮崎 真ん中はセンター合わせるとに、どげんしたらよかとですか？

雄一 センターば合わすつとは前と後ろで、すつとですよ。

渋谷 真ん中は入場の時のセンターと回しの時のセンターば決めるとが仕事さ。

宮崎 なかなか難しかですね。

渋谷 そがん簡単に、いくもんか。

陽平 絶対決めてやる。

渋谷 新人二人にでくつかなあ？

辰巳 亀さん。みんな、一生懸命しよつとぞ。

雄一 まずは、走りのスピードとセンター決めですね。

辰巳 明日はそこところを気いつけてやるぞ。

みんな はい、頭。

辰巳 ということで、本日の反省会は本当に終了。

宮崎 え、もう終わつとですか。

千恵子 あんた。雄一に花ちゃん遅らせてよ。

千恵子 わかった。じゃあ、先に帰るね。

陽平 うれしかあ。

渋谷 あれ、話の長うなって、遅うなるて言うたに？

辰巳 亀さん。

渋谷 どこかに行くとかなあ？

陽平 『かぶりつき』。

辰巳 うるさか。

渋谷 おかみさんが知ったら・・・。

辰巳 ううん。よか。みんな来い。話の続きばすつぞ。

陽平 やったあ。

宮崎 おいも今日は行きます。

渋谷 珍しかね。

宮崎 亀さんにも、いろいろ教えてもらいたかけん。

陽平 気いつけんばよ。悪かけん。

渋谷 なんて、陽平。(宮崎に) ばってん、でくつかなあ。

辰巳 (少しやけになって) そがん言わんで、教えてやれ。

宮崎 亀さん、前回の回しは決まっとったとでしよう。

渋谷 名センターの居ったけんね。

陽平 メイはメイでも迷うメイげな。

宮崎 陽平。

辰巳 よかけん。そがん話は店でせろ。

渋谷 そいじゃ、頭のおごりで飲もうか。

宮崎、陽平、渋谷、話しながら出て行く。出て行くこうとして辰巳が雄一に言う。

辰巳 雄一は花ちゃんば送っていけ。
雄一 え？

花子、出て来る。

花子 お疲れ様でした。

辰巳 花ちゃん。お疲れさん。雄一に送ってもらえ。

花子 え、よかです。一人で帰れるけん。

辰巳 花ちゃんば一人で帰したら、千恵子に怒らる。雄一、頼むぞ。

雄一 はあ。

辰巳 おいは打ち合わせに行ってくっけんな。

辰巳、出て行く。

花子 雄一、行きたかったとやろう？よかよ。

雄一 あ、いや。送った後でみんなのところに行くけん。

花子 何か、久しぶりって感じ。

雄一 何が？

花子 ううん。東京はどう？

雄一 まだ、慣れん。

花子 玲奈さん、送らんでよかったと？

雄一 聞こえとったとか？

花子 うん。

雄一 仕方なかやる。話し合いの途中やったけん。

花子 テニス部で一緒にね。
雄一 よう知つとんね。
花子 玲奈さんが言いよった。
雄一 何か言いよったか？
花子 ううん。私を写真で見たって。
雄一 ほら、県大会で優勝した時、みんなで撮ったやつさ。
花子 玲奈さん、雄一のこと好きんごたるね。
雄一 ええ？そがんことなかさ。
花子 雄一は玲奈さんのこと好いとつと？
雄一 え、急になんね。
花子 ごめん。なんば言いよつとやるね。
雄一 花ちゃん・・・。
花子 高校の時は、よう送つてもろうたね。
雄一 そやな。テニスの練習、終わるまで、待つてもろうて。
花子 雄一の練習、見ると、好いとつたけん。
雄一 そつか。
花子 いつから知つとつたとかな？
雄一 え。
花子 うちと雄一は、いつから知り合いやつたとかなつて。
雄一 幼稚園からやろう。
花子 本当、幼なじみや。
雄一 え。
花子 玲奈さんが雄一から、うちのこと幼なじみで聞いたつて。
雄一 そいは・・・。

花子 本当なのね。聞いた時、何か……。うち、やっぱり一人で帰る。

花子が走って出て行く。

雄一 花ちゃん。

雄一は花子の後を追う。二人が去った後、静まりかえる鯉川町のくんち小屋。しばらくして、上手から綾子と辰巳が腕を組んで出て来る。

綾子 ああ、楽しかねえ。

辰巳 店、よかとや？

綾子 美奈ちゃん居おるから大丈夫。

辰巳 ちよつと待って。

辰巳は小屋の前で綾子を残し、小屋の中に入り、誰も居ないことを確かめる。

辰巳 だいい居らん。(綾子を連れて小屋へ入る)

綾子 うちが来てもよかと？

辰巳 もうだいいも来んやろう。

綾子、よろけて辰巳によりかかる。

辰巳 おおい。大丈夫か。そがん酒、弱かったっけ？

綾子 好きな男と二人になると、酔いが回るの。

辰巳 うれしかことば言うてから。

綾子 嘘言う取ると思っとる？

辰巳 思つてない、思つてなあい。

綾子 ずうっと二人きりになれんかったから、寂しかった。

辰巳 おいもさ。

綾子 今日は、ゆつくりよかたでしょう？

辰巳 いやあ。くんちの練習中やけん。

綾子 くんち好かん。

辰巳 精進せんといけんし。

綾子 嘘。奥さんとは、いちゃいちゃしよるくせに。

辰巳 そげんことなかよ。綾ちゃんだけ。

綾子 うれしか。

綾子、辰巳に抱きつく。

綾子 ねえ、船曳く時、何考えとる？

辰巳 え、何つて？

綾子 ねえ、私んこと考えとる？

辰巳 ええ。

綾子 くんちの奉納の時、私んこと考えとる？

辰巳 馬鹿、神様ん前ぞ。

忘れ物を取りに来た千恵子が入り口で聞いている。

綾子 だめ？じゃあ、くんち、うちんために、頑張るって言うて。

辰巳 ええ？

綾子 綾子んために頑張るって。

辰巳 何でそげんことば言わんぼと？

綾子 くんちの間、会えんけん、寂しかと。

辰巳 そいけんて。

綾子 うちんために頑張るって思ったら、寂しくなけん。

辰巳 そがん、うれしかことば言うて。

綾子 じゃあ、言うて。綾子んために頑張るって。

辰巳 あやちゃんのために・・・

千恵子が入り口から入って来る。辰巳、綾子からパッと離れる。

辰巳 お、お前、どうしたとや？

千恵子 そっちこそ、どうしたと？

辰巳 あ、いや、捜しもんば忘れに。

千恵子 あら、私もよ。捜しもんば忘れに。(綾子を見ながら) で、そちら、どちら様？

綾子 (堂々と) まあ、ご挨拶が遅れました。『スナックかぶりつき』の綾子と申します。辰巳さんにはいつも御ひいきにしていたでいて。

辰巳 一緒に探してもらいよつとき。

千恵子 (綾子に) これは、いつも主人がお世話になっております。(辰巳に) で、忘れ物はあったと？

辰巳 いや、ここじゃなかごたる。

千恵子 (綾子に) 不景気で銅座も大変と聞いた取りましたけど、わざわざ、いっしょに来てくださるなんて。ありがとうございます。
綾子 いえ、そんな。

千恵子 よつぽど、お店、お暇なんでしょうね。(言いながら綾子から辰巳に目を動かす)

綾子 まあ、奥様にご心配していただくなんて、恐縮ですわ。

千恵子 こんな景気で色仕掛けで、客ば呼んだる低俗な店もあるとすってね。

綾子 そがんですか。そいはよその店でしょ。うちは繁盛しとりますけん。

千恵子 そいはよかった。ばってん。そがんお忙しかとに、店ば、ほっぽって、わざわざ、こがんとこに来るなんて。

綾子 困ってる人みると、ほっとけないたちで。

千恵子 あらあ、銅座の女はお金でしか動かんで聞いたけど。お優しかことで。

綾子 そいは二流。一流はハートで動くですよ。

千恵子 そげん言うとなら、お二人の関係は金じゃなか、ハートの関係ていうことたいね。(辰巳を睨む)

綾子 誤解なさらぬでくださいね。でも、頭はすてきな方ですわ。

千恵子 そげんこと、あなたに言われんでも妻の私が一番ようわかっとります。

綾子 店に居ると夫の良さをわからない奥様の話をたくさん聞くものですから。(辰巳を見る)

千恵子 妻の良さをわからん夫の話は聞かんのですか。(辰巳を睨む)

辰巳 あったあ。忘れものあったぞう！(言いながら、千恵子と綾子の顔を見るが無視され、小さくなる。)

綾子 うちのお客さんは皆様、お優しい方ばかりで。

千恵子 そんな優しさにつけ込んで。好きな振りして金ば稼ぐとでしょ。

綾子 それは言い過ぎじゃ、ごさいません。

千恵子 いえねえ。二本足の泥棒猫の話ば、たくさん聞くもんやけん。

綾子 まあ。家で待ってる女の魅力もない老いぼれ猫の姿が目には浮かびますわ。

千恵子 老いぼれ猫！

辰巳 ああ、ママ。今日は疲れた。帰るわ。雄一たちに話は明日するって言うとして。

綾子 (辰巳に) あら、頭、寂しい。(千恵子を見て) それじゃ、今日は奥様とお帰りください。

綾子、出て行く。

辰巳 さあ、帰ろうか？

辰巳 辰巳が出て行こうとする。千恵子は、その場を動かない。

辰巳 どげんした？

千恵子 何ね。さつきは。

辰巳 何ねて？

千恵子 もう行かなくて、言うたやなかね。

辰巳 ツケのきくところ、あそこしかなかとき。

千恵子 言い訳は聞きとうなか。

千恵子、テーブルの上に置いてあつた紙コップを辰巳に投げ付ける。

千恵子 「二人きりになれんで寂しかった。おいも」って。鼻ん下ば長うしてから。

辰巳、紙コップを避けながら。

辰巳 おい、やめろ。

千恵子 あん女はなんね。

辰巳 お前の心配するごたつことはなか。

千恵子 信用でけん。

辰巳 おいは夫ぞ

千恵子 そいけん何ね。夫らしかことばしてくれたね。

辰巳　　こいからすっけん。

千恵子、一升瓶を手に取る。

辰巳　　そいはよせ。そいは、いくらなんでも。怪我する。

千恵子、一升瓶を投げようとして、座り込み、泣き出し、一升瓶をラッパ飲みする。

千恵子　　何で言うてくれんやったと。でけんて。

辰巳　　何のことね。

千恵子　　くんちの奉納のこと。

辰巳　　綾ちゃん（千恵子が睨む）あ、ママさんが言うたことか。

千恵子　　そんなこと。

辰巳　　大したことじゃなからう。

千恵子、泣き声が大きくなる。

辰巳　　（びっくりして）どげんした？

千恵子　　うちはあんたに、くんち、頑張っってほしかと。

辰巳　　おう。

千恵子　　うちも、あんたんために、頑張っつとつとよ。

辰巳　　おう、わかっつとる。

千恵子　　わかっつとらん。

辰巳　　何ね？

千恵子　うちは、あんたと、くんちに出ると。

辰巳　男しか出れんぞ。

千恵子　ぼけ。

辰巳　何ね？

千恵子　うちは出らんけど、あんたの、ここに居って（胸を叩く）、あんたと一緒に船は回しよつと。あんたの喜びば、うちも感じると。一緒に、ここで（胸を叩く）

辰巳　（千恵子の言葉に感動して）千恵子。

辰巳、千恵子を起こす。

千恵子　うちにとつては特別なんよ。くんちは。

辰巳　悪かったな。すまん。

千恵子　うん。

辰巳　帰ろうか？

辰巳、帰ろうとするが、千恵子は動かない。

辰巳　どうした？

千恵子　お姫様抱っこ。

辰巳　ええ？

千恵子　お姫様抱っこしてくれたら、許したげる。

辰巳　え。馬鹿、恥ずかしか。

千恵子　してくれるまで、動かん。

辰巳　年ば考えろ。

千恵子は動かない。

辰巳 女は恐か。

辰巳、千恵子を抱っこする。

千恵子 あんた。

千恵子、辰巳の肩に顔を埋める。宮崎と陽平が千鳥足の渋笠を肩に抱いて入って来る。渋笠かなり酔っている。

宮崎 亀さん。(辰巳と千恵子に気づいて) あ！

渋笠・陽平 (宮崎の声で顔を上げて、辰巳たちを見て) ああ！

宮崎、渋笠、陽平と辰巳の目が合う。

陽平 頭、何ぼしよつとですか。

辰巳 あ、いや、筋トレを。

辰巳、千恵子を上下に動かし、トレーニングのまねをする。千恵子は顔を辰巳の胸に付けたまま。

陽平 重かけん、丁度よかですね。

宮崎 陽平。

千恵子、顔を上げて、陽平を睨む。

辰巳 今日には先に帰るけん。みんなに、よろしゅう言うとして。

辰巳が千恵子を抱っこしたまま、小屋から出て行く。千恵子は、また、顔を辰巳の胸に付ける。

渋谷 (ふらふらしながら) なんか、当てられた感じやなあ。

宮崎・陽平 (渋谷を椅子に座らせながら) 大丈夫ね？

渋谷 大丈夫じゃなか。

陽平 亀さん。しつかりせんば。

宮崎 陽平。助かった。ありがとう。後はすっけん。みんなんところに戻って、頭の言うたことば伝えて。

陽平 良かけど、一人で大丈夫やるか？

宮崎 車で迎えに来てもらうけん。

陽平 そげんですか。そいじゃ、お疲れさんでした。

陽平、出て行く。宮崎、携帯電話を出して、電話する。

宮崎 (電話) ああ、おれ。今、終わった。亀さんといっしょ。亀さん酔つとるけん、車で迎えに来てくれんかなあ。すまん。小屋に居るけん。悪かけど頼むな。わかった。

宮崎、携帯電話を戻しながら。

宮崎 どげんしたと？いつも飲まんとに。

渋谷 悲しかとき。

宮崎 何かあったとですか？

渋谷 息子の来れんて。

宮崎 来れんて？

渋谷 くんちに来てくれんて。

宮崎 息子さん、どちらに居つとですか？

渋谷 福岡。学校のあるけん、来れんて。

宮崎 そげんですか。

渋谷 見てほしかと。どうしても。

宮崎 何か訳のあつとです？

渋谷 おいはだめ親父さ。

宮崎 そげんことなかでしよう。

渋谷 仕事はうまくいかん。家でも頼りにならんやつたと。

宮崎 はあ。

渋谷 そいで、妻が愛想つかしたとよ。

宮崎 そいで？

渋谷 くんちん時に別れたて言うたでしよう。本当は、くんちん前から別居しとつたとよ。

宮崎 そげんですか。

渋谷 そいけん、子供たち、くんちに出たおいば見とらんとさ。

宮崎 そいで。

渋谷 呼べるような心境でもなかつたし。

宮崎 大変やつたとね。

渋谷 (七年前を思い出すように) あん時は、くんちに助けられた。

宮崎 助けられた？

渋谷 くんちの無かつたら、寂しさから立ち直れんやつたかもしれん。みんなと居ると寂しさば忘れられたと。

宮崎 そげんですか。

渋谷 一生懸命やったけんね。

宮崎 ええ。

渋谷 おいには仲間の居おるる。一人じゃなから。

宮崎 そいで。

渋谷 気持ちの吹っ切れたとやろうね。一人でも強く生きて行こうて。そいで、くんちの終わってから、ハンコば押ししたとよ。でも、子供たちに父親らしかことば、してやれんかったことが辛うて。

宮崎 そいで、頑張つとる姿ば見せたかて。

渋谷 こいが最後やけんね。

宮崎 来てほしかですな。

渋谷 宮さんには関係な話やったね。

宮崎 うちも、うまくいつとらんとですよ。

渋谷 何が？

宮崎 家内と。

渋谷 他にだいか好きな人のおつとね？

宮崎 そがん訳じゃあなかとけど。

渋谷 そしたらなんね？

宮崎 こん頃、家内とこれからうまくやってけるかなあて。

渋谷 どげん意味ね？

宮崎 元気に生きて、あと二十年。こいから家内と二人で生きて行って幸せなかなあて思ったら、なんか、心の通じとらんように思えて。

渋谷 ばってん、家庭のあるて幸せなことですよ。

宮崎 はあ。

渋谷 人の事どうこう言う資格はおいにはなからけど。

宮崎 そげんことはななよ。
泷笠 なくして、初めて、自分の中での存在に気づくとよ。
宮崎 そがんもんやろか？
泷笠 大事にせんば。
宮崎 はあ、でも、今のおいでは、だめんごたる気のして。
泷笠 おいはくんちに打ち込んで、何か自分の変わった気のすつと。
宮崎 そげんですか。
泷笠 終わった時には感動したよ。
宮崎 みんな泣いたって聞きました。
泷笠 そいまでの自分と、どっか違うとよ。
宮崎 感動して、心が豊かになったとですかね。
泷笠 宮さんは頭んよかけん、すぐ考えてしまう。
宮崎 はあ？
泷笠 そいが欠点。
宮崎 欠点？
泷笠 兎に角、何も考えんで、一生懸命やらんですか。
宮崎 はあ。
泷笠 ああ、酔いの覚めてしもうた。帰ろうかね。今の話は雄一たちには内緒やけんね。あいつら、うるさかけん。
宮崎 はい。
泷笠 言うときくばってん。今日の話と、くんちの練習は別やけんね。明日からも手加減せんで、びしびし行くけんね。
宮崎 はい。(よろける泷笠を見て) 大丈夫ですか？
泷笠 だいじようブイ。(元気なそぶりをするが、その後、また、ヨロヨロしながら、歩いて出て行く)
宮崎 気いつけて。さようなら。

渋谷、出ていく。

宮崎 やるだけしたいね。やるだけ。

節子 節子が入り口から顔を出す。

宮崎 すまん。亀さん一人で帰った。

節子 そがんですか。

宮崎 寝とつたとやろう？わるかったな。

節子 いいえ。

宮崎 起きとつたとか？

節子 考えとつたと。

宮崎 何ば？

節子 どうするとかなあて。

宮崎 どうするって？

節子 私たち。

宮崎 こん前ん話か。

節子 ああなたが、どう考えとるとか知りたかと。

宮崎 どう考えるって。会社行って、家に帰って。毎日、暮らして。

節子 私でよかとですか？

宮崎 どがん意味ね。お前がよければ、そいでよかたい。

節子 あなたは、いつもそげんですね。

宮崎 何ね。

節子 お父さんたちの時もそう。

宮崎 話し合うたろうが。

節子 体調が悪くなってきたから、お二人では生活するのが、難しかつて。一緒に住もうか、施設に入っていたかどうか。って

宮崎 おいは仕事に行くけん。家に居るお前が決めるのがよかと思うて、お前に聞いたたい。

節子 あなたのご両親でしょう。

宮崎 そいはわかっとする。

節子 一緒に住みたかて、あなたが言うと思うて、覚悟しとつたとよ。

宮崎 そいなら、そうって言えばよかやつか。

節子 そういう問題ではなかでしょう。

宮崎

節子 どうしたかとです？これから？

宮崎 そいは

節子 いつもそう。(諦めて) 先に車のところに行ってます。

節子 出て行く。

宮崎 やるだけたいね。やるだけ。

宮崎、部屋に一人残る。徐々に暗くなっていく。

二場終了

三場

九月の中旬。くんち練習も、あと数日となったある日の練習前。町内の弓張り堤灯はない。くんち小屋に陽平、雄一、渋笠、虎男が集まっている。

陽平 昨日の船回しは中心のずれとらんやったでしよう？

雄一 大分、ずれんごとになった。

陽平 そやる。宮さんと話しながら工夫ばしよつとやけん。

虎男 わいたちにしてはようやつとる。

渋笠 そいばつてん、七年前よりは、まだまだ。

陽平 前回は自分がしよつたから言うて。

渋笠 練習初めて何日になると思うとつとつか？

陽平 一ヶ月。

渋笠 七年前はこん時期、もう完璧やった。

雄一 陽平、気にすんな。

渋笠 雄一。何て。

山城、辰巳、宮崎が入って来る。

陽平 長采、回しの時の中心のずれはどがんですか？

山城 どがんで？

陽平 前回より、よかでしょう？

渋笠 まだまだ。

宮崎 おいは大分ずれんごとになったて思うとですけど。

辰巳 前回は前回。比べてん、意味んなか。

陽平 頭の言う通り。

宮崎 長采はどう思うとつとですか？

山城 ようなってきた。ぼってん。もつとスピードのほしか。

宮崎 スピード。

辰巳 川船の走り、回しはスピードが勝負たい。

虎男 走り、回しの勢いのあるとは迫力満点ぞ。

渋谷 スピードは前回の方があつた。

陽平 まだ、言いよる。

宮崎 スピードですか。

山城 おいは、やるごとにスピードの上がる走り、回しば目指しとつと。

辰巳 そいば見たら、みんな、びっくりすつでしようね。

宮崎 みんな、今日は、走りのスピードば、もつと上げてやってみようぞ。

雄一 宮さん、何か燃えとつね。

陽平 うん。人の変わったごたる。

虎男 年寄りの冷や水にならな良かけど。

千恵子、入つて来る。

千恵子 今晚は。

山城 今晚は。

五人 今晚は。

辰巳 おう。

千恵子 (山城に) いつも、うちんひとがお世話になってます。

山城 頼りにしとつとよ。

千恵子 走り回しはどげんです？。

山城 どうにか形になってきたとよ。

千恵子 そがんですか。

辰巳 ばってん。こいからが勝負たい。

千恵子 もうすぐ、練習、終わりやね。みんな、がんばってね。

五人 はい。

山城 さあ、練習に行くぞ。

全員 おう。

山城を先頭に宮崎、洪笠、雄一、出て行く。陽平、辰巳が千恵子を残して出て行くこととする。
千恵子、辰巳のところに近づいて来て、

千恵子 待って、あんた。

辰巳 どげんした？

千恵子 (甘えながら) 呼んでみただけえ。

辰巳 ああ。

千恵子 頑張ってね。

辰巳 まかしとけ。行くぞ。

辰巳出て行く。陽平後をついて行く。出口で止まって。

陽平 おかみさん。

千恵子 なんね。

陽平 (千恵子のマネをして) 呼んでみただけえ。

千恵子、陽平を睨む。陽平、急いで出て行く。千恵子、部屋の掃除を始める。としが入って来る。その後ろにゲームをしながら宏二が入って来る。

千恵子 今晚は。

とし 今晚は。長采は居らんね。

千恵子 今、練習に行ったですよ。

とし そうね。

千恵子 何か用ですか？

とし 庭見せに借りようとした場所の、どうも使えんごたるとき。

千恵子 あのスーパーの前の場所？

宏二 じいちゃんのちゃんとせんけんさ。

とし 本当、頼りにならんね。(千恵子に) 三日から売り出しばするとげな。

千恵子 そういえば、十月三日から「くんち売り出し」て書いてありました。

とし 四日からなら、三日の庭見せできるとに。

宏二 今の大人は、くんちば金儲けの道具としか思うとらん。そがんだ人の居るけん、子供の悪うなるとき。

とし 宏二、よう言うた。さすが、うちの孫やね。

千恵子 交渉したらどげんですか、店の人と？

とし そいけん来たと。うちん人が「今から頼みに行く。」て言うけん。「そいなら長采ば、連れて行かんね」て、言うたとき。

宏二 ひとりじゃ、頼りんなかもんね。

とし 長采は居るね。

宏二 さつき、聞いた。練習に行ったて。

とし そうやった。最近、すぐ忘るつねえ。

宏二 (小さな声で) ぼけが。

千恵子 四日の人数揃いの場所は大丈夫とですか？

とし そいは大丈夫よ。うちがすぐに神社にお願いして、確約は取ったけん。

千恵子 そいはよかった。

宏二 早う練習場所に行かんばやる。

とし そうやね。そいじゃ。お疲れさん。

としと宏二が出て行く。

千恵子 もうすぐやね。

千恵子、船歌を口ずさみながら、掃除を続ける。節子が入って来る。

節子 今晩は。

千恵子 今晩は。もう練習に行ったよ。何か用？

節子 携帯ば忘れて。

千恵子 いつも偉かですな。

節子 え？

千恵子 うちなら忘れもんは、ほっとくね。

節子 そげんことなかでしよう。

千恵子 うちのひとが羨ましかて。

節子 え？

千恵子 あんが、優しか嫁さんがよかったって。

節子 そんな。

千恵子 そりゃ、あんな素敵な旦那さんやったら、うちも、そうなるて言っただけどね。

節子　そがんことなかですよ。
千恵子　お似合いの夫婦やねえって、評判よ。
節子　え、本当。(急に考えるように) そがんことなかとに……。
千恵子　どがんかしたと？
節子　え、いいえ。
千恵子　本当？
節子　今、二人で今後どうするか、話し合えば、しよつとですよ。
千恵子　どうして？
節子　いっしょに暮らしていけるかって。
千恵子　何で？
節子　何ででしょうね。
千恵子　何か原因のあるとでしよう？
節子　どうしてでしょうね。
千恵子　夫婦のことは夫婦でしか、わからんもんね。
節子　そう言えば、こん前、夜、会ったとでしよう？
千恵子　宮さん、あんことばしゃべったと？
節子　頭が奥さんば抱っこしとったって。
千恵子　あいは、うちんひとが悪か事ばしたけん。
節子　言ってみました。喧嘩ばした後んごたったって。
千恵子　宮さん。あんまり、そがんことは、しゃべらんこと見えるけど。
節子　よかなあって。
千恵子　よかなあって？
節子　ええ、あがん、気持ちば、ぶつけられたらよかなあって。
千恵子　ぶつけすぎて、うちんひとの顔は、ぼこぼこやけど。

節子　そいが原因かもしれんね。

千恵子　え？

節子　今のわたしたちの・・・。

千恵子　どがんとしたと？

節子　そんな話は聞いた時、ふっと私も悪かったのかなあつて。

千恵子　節子さんが？

節子　ええ。私も気持ちば、ぶつけとったとかなあて。

千恵子　ぶつければよかじゃなかね。

節子　え？

千恵子　宮さんにぶつくつとき。

節子　(考え込むように) あんひとに・・・。

千恵子　うちんひとが言いよったよ。宮さんは凄かて。

節子　(我に返って) え、どうして？

千恵子　あん年で、気合いも、体力もおいたちに負けとらんで。

節子　一生懸命やもんね。

千恵子　気合いば入れんと、負けてしまうて。

節子　そがんですか。

千恵子　宮さんの頑張りは、凄かて私も思いますよ。ばつてん、宮さんだけの力じゃなかとよ。

節子　どげん意味です？

千恵子　節子さんの力のなからんと。

節子　私の力？

千恵子　くんちは男しか出れんけど、そんな男たちば支えるもんのおつて、初めて、男たちは、頑張るつとよ。

節子　そげんですか？

千恵子　船ば曳くうちの人ば見ながら、うちもいっしよに船ば曳きよつとよ。

節子 はい。

千恵子 そいけん、二人でくんにぶつかってみれば？

節子 二人で。

千恵子 終わった時に何か答えるのづるよ。

節子 答えるの。

千恵子 いっしょにやりましょう。

節子 はい。

節子の携帯電話が鳴る。

節子 (電話) もしもし。はい。家内です。ええ。怪我はひどいのですか？わかりました。高橋整形外科ですね。

節子携帯をしまいながら、出て行く。

千恵子 どうかしたと？

節子 (気持ちが動転して) 怪我して病院に。

千恵子 節子さん。怪我で。

節子、気持ちが動転して、千恵子の声が聞こえていない。節子、急いで出て行く。入れ替わりに花子が「千恵子さん」と叫びながら慌てて入って来る。

千恵子 どうしたとね？

花子 練習中に怪我ばして。

千恵子 怪我。宮さんね。

花子 どうして、そいば。

千恵子 今、節子さんの携帯の鳴って、出て行ったとよ。

花子 連絡ついたと、よかったあ。

千恵子 でも、どうして？

花子 船回しの時に足ば挟んで。

千恵子 何でまた。

花子 軸ば動かさんごと、踏ん張って。きれいに回りよったとよ。見とるみんながヨイヤヤーて声ば掛けること。

千恵子 そいで？

花子 走りで船ば止めるやろう。そんな時、足の滑って、車の下に入ったとよ。

千恵子 勢いのある時、危なかもんね。

花子 みんな、波んごたったとよ。

千恵子 心配かね。みんなどうしととと。

花子 練習できんけん解散したと。

千恵子 うちんひとは？

花子 長采たちとここに來るって。

虎男、雄一入って來る。

雄一 何でまた。

虎男 やっぱ、年やろう。

雄一 年で。

虎男 そやけん、年やつけんスピードについてこれんやったとよ。

雄一 そがん事なか。

千恵子 どうね？

雄一 詳しか事は、わからんです。

千恵子 うちんひとは？

虎男 今、長采たちと来よつです。

千恵子 じゃあ、お茶でん、用意しとこうか。

千恵子、花子、奥に入る。

雄一 動けんやったら、どうしよう。

虎男 今、いろいろ言うてもいつしよやろ。

雄一 わいは心配にならんとか？

虎男 わいは優しかもんな。おいと違うて。

雄一 何ね。

虎男 雄一はみんなに優しかて。

雄一 そいは嫌味ね。

虎男 嫌味てわかったね。偉かあ。

雄一 今、そげんこと言うことなかやろ。

虎男 わいの優しさぶりっこの好かんとさ。

雄一 おいのいつ、優しさぶりっこした。

虎男 花ちゃんのことさ。

雄一 花ちゃん？

虎男 どうすつとや。花ちゃんのこと。

雄一 どうすつて。

虎男 花ちゃんの気持ち、分かつとつとやろ。

雄一 そいは。

虎男 玲奈さんと付きおうとつとやる。

雄一 そげんこと。

虎男 こん前、玲奈さんから聞いた。

雄一 知つとつとか。

虎男 知つとるもなんも、東京から一人で会いに来たら、玲奈さんが、お前は好いとるて誰でんわかるさ。

雄一 そうやるか。

虎男 そがんとこの抜けとつとね。

雄一 よう言わるつと。時々、抜けとつて。

虎男 ようはおまえん気持ちが、どうかたい。

雄一 どうて？

虎男 玲奈さんも花ちゃんに会つて、雄一が、どがん気持ちか、不安になつたつて言いよつた。

雄一 玲奈さんがそげんことを。

虎男 はつきりせんと。

雄一 ばつてん。花ちゃんば傷つけとうなかし。

虎男 そいけん。わいは狡ずるかとき。

雄一 そがんことなか。

虎男 わいは花ちゃんば傷つくつとの恐かとしやなか。自分が悪者になるとの恐かとき。

雄一 そいはなか。

虎男 花ちゃんが諦めてくれたら、自分がフツたわけじゃなかけん、自分はいい子でおらるつもんな。

雄一 そげんことは・・・

虎男 おまえが、はつきりせんと、花ちゃんも玲奈さんもかわいそか。

花子が奥からコップを持って出て来る。

花子 宮さん、大丈夫やるか？
虎男 もうすぐ、病院からここに来るやる。ちよつと様子ば見てくっけん。

虎男、出て行く。

花子 大変やね。

雄一 うん。

花子 宮さん、出れるやろうか？

雄一 うん。

花子 雄一は大丈夫ね。雄一、優しかけんね。

雄一、花子の間に沈黙が流れる。そのうち、同時に相手の名前を呼ぶ。

雄一 花ちゃん。

花子 雄一。

雄一 ごめん、何？

花子 ごめんなさい。雄一こそ先にどうぞ。

雄一 花ちゃん……。話のあつと。

花子 急にどがんかしたと？

雄一 なかなか言えんやったとぼってん。

花子 何ね？

雄一 おい……。好きな人のできたと。

花子 。。。。

雄一 東京に。

花子
玲奈さん？

雄一、頷く。

雄一
言おう、言おう思ったとばってん、なかなか言えんで・・・。

花子
・・・。

雄一
花ちゃんのこと好きやけど、どうしても友達以上には思えんで。

花子
・・・。

雄一
花ちゃんは何も悪うなかとさ。おいが・・・。

花子
何も言わんで。

花子、泣きながら、出て行く。

雄一
花ちゃん。

千恵子、出て来る。

千恵子
花ちゃんは？

雄一
(俯うつむいて) 帰かえったです。

千恵子
帰かえった？ (雄一を見る)

千恵子
どうしたとね？

雄一
(俯うついたまま)・・・。

千恵子
(二人のことを察して) そげんね。

長采、とし、宏二、渋谷、辰巳、陽平、虎男が入って来る。
長采・とし・宏二・渋谷の四人、辰巳・虎男・陽平の三人がそれぞれ話している。

とし ばってん。出れんやったら、十五人になるやろう。

渋谷 そいじゃ、動かんですよ。

とし 早う、代わりば探さんば。そうや、うちの宏ちゃんはどうね。

宏二 ねえ、出れると？

山城 待つてください。宮さんの状態のわからんうちから。

とし うちのひとに恥かかせるとは、許さんけんね。

宏二 ねえ、出れると？

渋谷 そいも良か手かもしれんね。

山城 亀さん。(としに) そいは無理ですよ。

とし そしたら、他に出れる人のおっとね？。

千恵子、としに。

千恵子 どがんですか？

とし 大変かことになったばい。

雄一が陽平・虎男、辰巳の所に近寄って行く。

陽平 トラにいちゃん、冷たか。

虎男 おいは冷静に言いよつと。

辰巳 トラが冷静てか。

陽平 みんな、何か、悪か。

辰巳 悪かった。でも、今、考えても何も始まんやろう。

雄一 (陽平に) どがんとしたと？

陽平 (雄一に) みんな、宮さんのこと、心配せんで、船のことばかり言いよつと。

辰巳 陽平。そがんことなか。みんな心配しとる。

山城 (みんなに) いろいろ心配やけど、宮さんの帰ってこんば、話の進まんやろう。

とし そいはそうやけど、出れんやったら。困ったねえ。

洪笠 (大きい声で) やっぱ、年には勝てん。

陽平 (洪笠に向かって) そげんことなかです。

虎男 いくら頑張っても、本番に出れんやったらいっしょやろ。

雄一 出れんて、決まった訳じゃなかでしょう。

辰巳 うるさか。

一同、静かになる。

宏二 おい、出たかあ。

とし おお、出してやるけん。

辰巳 そいは無理でしょう。小さかし、今から力つくる時間もなかし。

宏二 でくるもん。

雄一 宏二、遊びじゃなかとぞ。

宏二 そいばつてん。

雄一 おいは、宏二には、まだ、早かて思うぞ。そいでん、出たかか。宏二。

宏二 そがん、雄一兄ちゃんの言うとなら、おいは・・・

とし そがん言うとなら他に代わりのできると、居おつとね？

波笠 若うて、体力のある奴ね。
山城 亀さん。

宮崎と節子が入って来る。宮崎は足に包帯し、足を引きずっている。

山城 どがんでした？

宮崎 はい。骨は折れとらんということでした。

陽平 縫うたのですか？

宮崎 はあ、五針。

山城 先生は、くんちに出ることは何て言いよったですか？

宮崎 難しかて。

辰巳 だめてですか？

宮崎 傷の開いて、化膿するかもしれんて。

とし 化膿するて。恐ろしか。

山城 どがんしたらよかやろか？頭。

辰巳 長采。船は十六人でしか回らんですよ。

波笠 そう。早う代わりば探さんと。

とし 宏ちゃんば出せば良かやろ。

宏二 (雄一を見ながら、としに) ばあちゃん、もうよか。

山城 みんな、ちよっと待たんね。宮さん。絶対だめてですか？

宮崎 絶対だめとは・・・。

辰巳 怪我したもんの入っても、船は回らんやろう。

虎男 そげんです。

陽平 宮さん、できそうになかですか？

宮崎 痛うして、力の入らんで、みんなに迷惑ばかりかもしれんし。

陽平 おいは今の十六人でやりたか。知らん人の入ってきて欲しゅうなか。

渋谷 そしたら、十五人で回すてか？

辰巳 そしたら、船は回らん。

雄一 ぼくらで、回します。宮さんは曳く振りだけして、一緒に出ましょう。

陽平 そいは良か。やろう、宮さん。

雄一 みんなで力合わせればでくつき。

虎男 雄一は、あんがん言いよっぱってん、でくつとですか？長采。

山城 そげん、あまかもんじゃなか。

辰巳 おいもそう思う。大事かとは、よか演技のでくつかどうかたい。

雄一 そいは、おいも一緒です。

辰巳 十六人の力の一つになって、はじめて船はきれいに回るとぞ。

渋谷 足の悪ければ演技の途中で、転ぶかもしれんもんね。

とし そがんなつたら、みんなの笑いもんたい。

雄一 そげん言うても、代わりはおらんでしょう。

とし そこよね。(宏二を見る。宏二、首を横にふる。)若うて、体力あつて、川船のことを知つとるもんで。宏ちゃん以外に居つたかなあ。

三郎、町内弓張り堤灯を持って入って来る。

三郎 今晚は。

辰巳 そがん都合のよか人間はおらんでしょう。

三郎 宮さん、足大丈夫とですか？

宮崎 ええ、骨は折れとらんやつたです。

みんな三郎に注目する。

三郎 お疲れ様です。宮さん、お大事に。

三郎、帰ろうとする。

とし ちよつと、待ったあ。三郎。(三郎を呼び止める) あんた、病気はなかね？

三郎 ええ、病気？

渋谷 悪かことしたろう？

三郎 したらん。

山城 (渋谷に) 亀さん。(三郎に) 今、体に悪かこのなかか聞きよつと。

三郎 元氣、はつらつ！ですけど。

とし そうね。よかった。暇もあるごたつし。

三郎 暇のあるていうか。暇じゃなかっていうか。

陽平 三郎は浪人で勉強せんばけん、だめですよ。

辰巳 三郎、船曳けるや？

三郎 何のことです？

渋谷 宮さんが足怪我して、くんちに出れんごとなつたと。ピンチヒッターたいね。

三郎 ええ、くんちに出るつとですか？

山城 三郎やったら、練習は見とるけん、要領はわかるやろう。どうね。

三郎 はい、流れは頭に入つとつです。

辰巳 練習は、あと少しやけど、どうにか間に合うやろう。

陽平 そいばつてん、本番の着物は、もう頼めんでしょう。

渡笠 身長は、宮さんとそう変わらんけん、着物、回せるやろう。

雄一 おいは納得いかんです。

辰巳 雄一、みんな、宮さんといっしょに、やりたかて思うとつき。ばってん、一番大事かことは奉納踊りを成功させることたいね。

雄一 わかつとるですけど。宮さんに悪か。

山城 おいも頭と同じ考えや。おいたちには、よか奉納踊りばする責任のあつと。

とし そうそう。誰もおらんやったら、しかたなかけど、こうやって、よか人のおつたとやけん。

山城 (三郎に) 勉強大丈夫や？

三郎 はい。でも、お袋が・・・

辰巳 おいが、後でかあちゃんに話に行くけん。

三郎 (直立不動で) はい、ありがとうございます。(ニコニコしてみんなに) おい、頑張ります。

雄一 (山城に) 本当に三郎と代わつとですか？

渡笠 良か演技ば、するためには、しかたんなか。長采、早う決めましょう。

陽平 そんなあ。

山城 他に意見なかか。宮さん、そういうことやけど、どうね？

宮崎、静かに頭を下げる。

山城 そいじゃあ、三郎を宮さんの代役にするけん。

節子 (長采の言葉を遮るように) 待って下さい。あなた、本当によかとですか？

宮崎 え？

節子 あなたの本当の気持ちはどげんね？

宮崎 どげんて。急に何ね？

節子 出たかと？出とうなかと？

宮崎 そりゃ、出たかき。ばってん、怪我して、みんなに迷惑かけるかもしれんやろ。

節子 いつもそうね。

宮崎 なんね、こげん時に。

節子 なんでんそう。問題があると、自分で答えば出さんで、逃げて。

宮崎 おいが、いつ逃げたね。

節子 そうじゃなかね。今も。

宮崎 どこが？

節子 あなたは、みんなが出す答えば待つとるだけたいね。

宮崎 そげんことなか。

節子 本当にそう？

宮崎 そげんこと・・・。

節子 あなたは、本当はどげんしたかと？

宮崎 ・・・・。

節子 あなたの頑張りば見てきたけん、うちは後悔してほしゅうなか。

宮崎 節子。

節子 一度ぐらい自分の本心ば言葉にしたら。

一同、宮崎を見る。宮崎ゆっくり話し出す。

宮崎

おいは年ば取つとるし、みんなの足手まといにならんごと、出ると決まってるからは、階段ば登ったり、家の回りば走ったり、準備はしました。練習に入ってからからは、練習の後の飲み会も、次の日の練習に差し支えんように、行かずに帰って休みました。練習の前も、来れる日は早う来て、ストレッチしたり、本番が無事、終わるように、がんばつてきたつもりです。

陽平

みんな知つとつですよ。
宮崎 こん年になつて、自分がどがん生きて行きたかとか、わからんようになって、そがん自分が嫌で、そげん時にくんちの話が

きて、何かしらんけど、嬉しかった。年のことば考えると不安やったけど。長采や頭と出会って、みんなで一生懸命船ば回して……………。

宮崎、言葉が詰まる。そして、また、ゆっくり話し出す。

宮崎

こがん怪我ばして、情けなかです。せつかく、船がうもう回るようになったとに。怪我が悔しかです。みんなの力が一つにならんとよう船の回らんことはわかってます。長采も頭も、そして根曳きのみんなもそんために心ば一つにして頑張ってきました。そんみんなと、こがん足の状態でいっしょに演技して、途中躓きでんしたら、みんなの努力が無駄になります。そいば思うと……………。

雄一

宮さん。

宮崎

ばってん。出たかです。本心、出たかです。おいの我が儘わがままですけど。みんなと船ば曳きたかです。みんなと一つになって船ば回したかです。

節子

うちからもお願いします。傷はうちが絶対に本番までには治して見せますから。こん人を出してあげてください。お願いします。

一同、静まり返る。

山城

(ゆっくり話します) 宮さん。ようわかりました。みんな、どがんや？

山城、みんなを見回す。

山城

亀さん。どうや。

渋谷

……………。(静かにうつむく)

山城

おいは、今ん言葉ば待った。

宮崎 長采。

山城 なあ、頭。

辰巳 船回しに一番大事かとはここですけん（胸を叩く）。今の宮さんやったら、大丈夫思います。

とし そげん、甘かもんじゃなからう。

三郎 おいでよかとですか？

陽平 どげんすつとですか、長采。

一同、山城を見つめる。

山城 （みんなを見回して）うん。決めたばい。根曳きは今の十六人でいく。よからう頭。

辰巳 はい。長采が決めたんなら、従います。みんなもよからう。

みんな（力強く）はい。

辰巳 よかったな。宮さん。

宮崎、男泣きする。節子が、そつと寄り添う。

雄一 宮さん、頑張りましょう。

虎男 宮さん、ちよつとカツコよかったばい。

陽平 宮さんと一緒にやれる。うれしかあ。

渋谷 泣くとは早かあ。くんちが終わってからばい。（いいながら涙を拭く）

宮崎・節子 ありがとうございます。

とし うちは知らんよ。

山城 責任は、わしが取りますけん。

とし 宏ちゃん。おいで。

宏二 (出て行きながら) 宮さん、がんばれよ。

とし、宏二、出て行く。

山城 三郎、すまん。

三郎 いいえ。おしも宮さんの頑張り知つとるけん。

宮崎 三郎。すまん。

三郎 宮さん、頑張ってくださいよ。

節子 本当に、すみません。

三郎 そがん言われたら、困る。こつちが宮さんに出番、取られたごたつ気になるけん。

陽平 くんちに出て、大学、また、落ちたら、おいたちが三郎の母ちゃんに恨まるつもんな。

三郎 縁起の悪か事言うな。

辰巳 (しみじみと) おしも良かったあ。

三郎 何がですか？

辰巳 わいの母ちゃん、恐かもんなあ。

虎男 浪人生、頑張つて勉強せんばぞ。

三郎 早う帰ればよかった。

みんな笑う。誰からともなく、根曳き歌を歌い始める。

朝日に向かつて漕ぎ出す船の (アーヨウイヨイ)

あれは川船 鯉川町よ (サーヨウイヤサ、アーヨーヤーセ)

荒波けたてて、白波の中 (アーヨウイヨイ)

走る船頭の ああ 心意気 (サーヨウイヤサ、アーヨーヤーセ)

歌い終わると、みんな思い思いに周りの人と喜びを分かち合う。

辰巳 そいじゃ、みんな、話もついたらけん、飲みに行こうか。
みんな はい。

辰巳 長采も、どげんです。

山城 なんか、今日は飲みたか気分やね。

辰巳 おまえも来い。

三郎 よかとですか？

渋谷 浪人生はジユースね。

三郎 浪人、浪人、言わんでよ。

渋谷 さあ、行こうか。

陽平 また、『かぶりつき』ですか？

辰巳 今日は違うところ。

雄一 どこです？

辰巳 『お姫様抱っこ』。

陽平 そがん店あった？

辰巳 新しかと。

陽平 ママさん、きれかとですか？

辰巳 おう、最高ぞ。

千恵子 いやあ、そがん言うて。恥ずかしか。

陽平 え、何で、恥ずかしかと？

渋谷 『お姫様抱っこ』って、頭ん家ね。

千恵子　うちじゃ、だめて？

洪笠　いえいえ、本当、きれかママさん。

みんな笑う。

辰巳　さあ、行こうか。

千恵子　何も無かばってん、どうぞ。

虎男　頭、今日はとことん飲ませてもらうばい。

辰巳　よかばってん。あばるんなよ。

辰巳、虎男、洪笠が話ながら、出て行く。

山城　宮さん、どうね？

宮崎　はあ、今日は帰ります。

山城　そうやな。今日は無理せんで、休んだ方が良かな。

千恵子　節子さん。よかつたね。

節子　ありがとうございます。

千恵子　良うなつてから、遊びに来てね。

宮崎・節子　はい。

山城　そいじゃあ。頭んところへ行くぞ。

山城出て行く。

千恵子　どうぞ。て、うちん人は？

雄一 もう、さきに、行ったですよ。

千恵子 うちば置いて行って、どがんすつとやろう。(急いで出て行こうとしながら、陽平、三郎、雄一に) ゆっくり来てよかけんね。

千恵子 出て行く。

陽平 ゆっくり来いて？

雄一 準備のあっけんさ。

陽平 今日の酒はうまやるねえ。

三郎 わいも十九やか。ジュースさ。

陽平 社会人と浪人生は違う。

三郎 酒は二十歳から。

雄一 二人とも止める。頭たちの待つとるけん。行くぞ。(宮崎に) そしたら、宮さん。失礼します。

陽平 宮さん。さようなら。

三郎 お大事に。

宮崎 ああ、今日はありがとう。

節子 ゆっくり、お辞儀をする。陽平、雄一、三郎出て行く。

宮崎 ありがとうな。

節子 何が？

宮崎 みんなに頼んでくれて。

節子 頑張ってたもん。

宮崎 そうか。

節子 少し、見直した。
宮崎 そうか。(宮崎歩こうとして) 痛たたた。
節子 大丈夫？

宮崎、節子の肩を借りて、足を引きずりながら出て行く。

三場終了

四場

くんちの前日(くんち一日目)。出発前、朝六時頃の小屋。千恵子と辰巳が話をしている。

千恵子 いよいよやね。
辰巳 ああ。
千恵子 大丈夫？
辰巳 おいは頭ぞ。
千恵子 思い出すね。
辰巳 何ば？
千恵子 十四年前。
辰巳 おいが、初めて根曳きに出た時たい。
千恵子 あん時、初めて、あんたに会ったと。
辰巳 そうやったつけ。

千恵子 覚えとらんやろ。周りに、いっぱい女の人の居って、近づけんやったもん。

辰巳 もてたもんなあ。

千恵子 馬鹿。そして七年前。

辰巳 お前と会った。

千恵子 町内に戻ってきた時、しとったハチマキば私にくれたと。

辰巳 そうやったかな。

千恵子 私の宝物やもん。だから、私にとって、くんちは特別なんよ。

辰巳 おう。

千恵子 わかっとった？

辰巳 ここな。(辰巳手で胸を叩く)

千恵子 そう。ここ。(千恵子手で辰巳の胸を摩る)

宮崎、陽平、洪笠、雄一が入って来る。宮崎は足を引きずっている。

みんな おはようございます。

宮崎 頭、早かですね。

辰巳 おう。よう眠れたね。

宮崎 いやあ。興奮して眠れんで。

千恵子 宮さん。足、どう？

宮崎 歩くとまだ少し痛かけど、大丈夫。こん通り。(足を動かす。)

陽平 宮さん偉かねえ。

雄一 おいたち、負けられんね。

千恵子 節子さんのおかげやね。

宮崎 (照れながら) ほんと・・・。

渋笠 宮さん、ようここまで、頑張ったね。立派かよ。
陽平 亀さん。なんか、素直やね。

渋笠、宮崎を横に引っ張ってくる。

渋笠 宮さん。子供から連絡のあったと。今日、来るて。

宮崎 そがんですか。今日、お諏訪さんに。

渋笠 ええ。宮さんが怪我した時、言いよったでしょ。

宮崎 何て言うたっけ？

渋笠 忘れたとですか。「本心、出たかです。」って。

宮崎 いや、恥ずかしか。

渋笠 おいも、もう一度子供に自分の気持ちばぶつけたとです。「来て見てほしか」って。

宮崎 そがんですか。

渋笠 宮さん。頑張らんばたい。(にっこり笑う)

宮崎 亀さんには負けんばい。(にっこり笑う)

宮崎、渋笠はみんなのところにもどる。虎男が入って来る。

虎男 みんな。早かね。

陽平 よかった。

虎男 何がね。

陽平 みんなで、トラにいちちゃん遅刻せんやるか、心配しとったと。

虎男 おいは決めるときは決めると。雄一、ちよつと。

雄一と虎男がみんなから離れる。

雄一 何ね。

虎男 花ちゃんから聞いたぞ。

雄一 あの後から、花ちゃん、おいば避けとっと。

虎男 仕方なかやる。花ちゃん泣いとったぞ。

雄一 トラにいさんがはつきりしろて言うたとぞ。

虎男 だいま、お前のしたこと攻めとらん。

花子と玲奈が入って来る。

玲奈、花子 おはようございます。

みんな おはよう。

花子 (元気な振りをして) おった、おった。雄一。

雄一 (驚いて) は、はい。

花子と玲奈は雄一と虎男のところへ行く。

花子 玲奈さん、連れてきた。

雄一 玲奈(呼び捨て)るが、あわててさんをつける)・・・さん。

玲奈 おはよう。

虎男 玲奈・・・さん?(名前を呼び捨てにしてるので、おやっと雄一を見る)

花子 出発前に雄一に会いたいって。

雄一 ああ。

玲奈 手ぬぐい投げてね。花子さんと棧敷で見てるから。

雄一 花ちゃんと棧敷？

花子 玲奈さんの棧敷席、空きがあるって、誘ってくれたの。(元気に)しっかり投げろよ。

千恵子 (玲奈に向かって) 玲奈ちゃんも朝早くから大変ね。

玲奈 (千恵子の方を向いて) 早く目がさめちゃって。

渋谷 (玲奈に寄って来て) 玲奈ちゃん。今日、お友達は。

玲奈 後で、紹介しますね。

渋谷 え、来とつと。ますますがんばらんば。(体操しながら、陽平の方へもどって行く)

雄一 (玲奈に近づいて) 誰？

玲奈 浩。(雄一にウィンクして、宮崎に) あ、宮さん。足どうですか？

玲奈、雄一から離れて、宮崎の方へ近づいていく。ひとりになった雄一のそばに花子が来る。

花子 オトコ？

雄一 (頷いて) 祭りオタク。

花子 オタク。お似合いね。(雄一の耳元で) 雄一、こん前んこと、気にせんで良かけんね。

雄一 花ちゃん。

花子、言い終わるとすぐに玲奈の方へ行く。

花子 宮さん。足どうですか。

雄一に虎男が寄って来る。

虎男 雄一、よかったな。

雄一 (戸惑って) ああ。

虎男 玲奈ちゃんと、うまく行つとるようやな。

雄一 ええ？

虎男 玲奈、て。もうやったとか？

雄一 馬鹿。なんば言いよつとですか。

虎男 花ちゃんの場合は、おいに任せとけ。

雄一 ええ、て、何でトラにいきん？

虎男 (花子たちの方へ行きながら) 花子。

花子 はい。つて、何で、トラにいちやんに呼び捨てにされんといかん？

虎男 悪い、悪い。練習、練習。

花子 何？練習て？

みんな (虎男に) なんね、練習て。

陽平、雄一に近づいて行く。

陽平 (雄一に) トラにいきんどうかしたと？

雄一 (みんなの方に行きながら) さあ？そいより、出発の準備、準備。

陽平、雄一もみんなに加わる。とし、宏二、山城、三郎が入って来る。

とし
みなさん、おはようございます。

山城 おはよう。

みんな おはようございます。

とし 今日は頼みますよ。

みんな (元気に) はい。

とし 宮さん。どげんね？

宮崎 ご心配おかけしました。

とし 本当よ。でもよかったね。

宮崎 ありがとうございます。

とし あん時はああ言うたけど、悪気のあつた訳じゃなかけんね。

宮崎 はい。

とし うちはおんたば見直したよ。

宮崎 精一杯。頑張ります。

とし ここまで来たら、くんちば楽しんで。

宮崎 はい。

とし じゃあ、みなさん、うちん人のためにも、がんばってくださいね。

みんな はい。

宏二 がんばれよ。

みんな はい。

とし、宏二と帰りながら、

とし こいやつたら、宏ちゃんも五十歳まで根曳きでくるよ。

宏二 采振りもしたかあ。

とし その後やね。

宏二 長采は？

とし そりゃ、せんばさ。うちが絶対ならせてやるけん、心配なか。

話しながら、とし、宏二、舞台から去る。

渋谷 うちがならせてやるけん、心配なかつて。そんな頃は（指で数えて）百二歳ばい。あんばあさん、そこまで、生きる気やろか。

陽平 生きとるごたっけん、女は恐ろしかですね。

渋谷 陽平もわかつてきたやつか。

山城 さあ、いよいよ本番ぞ。

みんな おう。

三郎 宮さん。足の具合どげんです？

宮崎 （力強く）心配なかよ。

三郎 悔いの残らんよう、頑張つて下さい。

宮崎 ありがとう。足のこと考えず、思いっきり、いくけん

三郎 何かあつたら、ピンチヒッターがここにいますけん。

宮崎 （笑顔で）悪かけど。最後まで出番は無かよ。

三郎 そいば聞いて、安心しました。しつかり、見せてもらいます。

宮崎 おう。

山城 そろそろ、船の所に行こうか。

みんな はい。

長采 宮さんは、出発までここで休んどいて。

宮崎 いや、大丈夫です。

辰巳 これからが本番。休める時に休んどかんと。本番が勝負やけんね。頼むよ。

宮崎 はい。

宮崎、千恵子を残して、他のものは出て行く。

千恵子 宮さん。どうね。

宮崎 緊張しますね。

千恵子 そいで、節子さんとはどう？

宮崎 え。

千恵子 答え出た？

宮崎 どうして、知っつとですか？

千恵子 この前、ちよっと。で、ぶつかってみた？

宮崎 千恵子さんだったとですか。

千恵子 何？

宮崎 節子が「くんちにぶつかれ、ぶつかれ。」って言いよったとは。

千恵子 そいで。

宮崎 「お前、頭大丈夫か。これ以上ぶつかったら、くんちに出れんぞって。」二人で大笑いしたとですよ。

千恵子 二人、ぶつかったごたるね。

節子が入って来る。宮崎、足を引きずりながら節子の方に近づいて行く。

宮崎 どうかしたとね。

節子 ううん。

宮崎 何か忘れとったかなあ。

宮崎、身の回りを確かめる。節子、手を差し出しながら。

節子 がんばって。

宮崎、その手を両手で包みながら。

宮崎 おお。見とつてな。

節子 ええ。ずうと見とるよ。

辰巳の声が聞こえる。宮崎、出て行く。いつのまにか、足は引きずらなくなっている。しやぎりの音が聞こえてくる。

千恵子 宮さんの足どう？

節子 痛みは、まだあるようやけど、大丈夫！

千恵子 そう。もうすぐ出発やね。

節子 本当に、くんちつてよかですねえ。

千恵子 これからが本番よ。

節子 本当、これからやった。

節子と千恵子、笑いながら出て行く。しやぎりの音がだんだん大きくなる。船の道行き、走り、回しの囃子、掛け声が流れる。

終わり